

第3回 「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」 シンポジウム

～ 被災地を知る。そして、—事前復興—を考える。～

と き・2014年2月1日(土)

ところ・黒潮町立 大方あかつき館



公益社団法人 高知県自治研究センター

被災地を知る。そして、 — 事前復興 — を考える。

2012年3月31日、南海トラフ巨大地震の新想定により最大34mもの津波に襲われる可能性を指摘された高知県下では、少なからず混乱をきたしている状況がある。

例えば、高台への移転が議論されるほか、住み慣れたまちを離れるという状況である。

これらは津波から事前に逃れるため、必要な議論ではあるが、私たちにはもっとすべきことがないだろうか？

東日本大震災の被災地と、近い将来大きな災害が予想される高知県のおかれた現状を踏まえたとき、将来を見据えた事前復興という考え方をもちつつ備えを進めることが必要である。

そして、まず私たちは知る努力をすべきなのである。

今回のシンポジウムでは、宮城県南三陸町の事例を中心に、被災当時の状況と今を知り、ともにこれからを考える場としたい。

【日時】2014年 **2月1日(土) 13:00～17:00**
13:00～ 南三陸町からの報告他
15:30～ シンポジウム

【場所】黒潮町立 **大方あかつき館** 幡多郡黒潮町入野6931-3
☎ 0880-43-2110

◎ 事前申し込みは不要です。どなたでもご参加ください。 **[入場無料]**

《主催》 公益社団法人 高知県自治研究センター ☎ 088-822-6460

第3回「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」シンポジウム

パネルディスカッション

「事前復興を 考える」

◎パネラー

三浦 勝美 さん
(みうら かつみ)



宮城県南三陸町役場

1962年生まれ。

1982年旧歌津町役場(合併後南三陸町)入庁。

東日本大震災の際、防災対策庁舎屋上で津波に襲われるも、漂流する畳に乗り、引き波で公立志津川病院の3階の窓に瓦礫とともに漂着。流された42人のなかで唯一の生還者。震災直後、罹災証明書発行担当。

及川 貢 さん
(おいかわ みつぐ)



宮城県南三陸町役場

1971年生まれ。

1996年旧歌津町役場(合併後南三陸町)入庁。

住宅行政に長く携わる。震災直後は応急仮設住宅、現在は町内に770戸建設予定の災害公営住宅整備業務を担当。被災者の一日も早い安定した住まいの確保に向け、日々奔走している。

浜 大吾郎 さん
(はま だいごろう)



徳島県美波町役場

1972年生まれ。

1995年旧由岐町役場(合併後美波町)入庁。

1998年から10年間、町の防災担当を務める。

2004年から地元の自主防災組織の事務局に就任し、防災まちづくり活動を通じて地域の持続可能性の向上を模索している。

大山 泰志 さん
(おおやま やすし)



高知新聞社

社会部記者

1977年生まれ。

2002年4月高知新聞社入社、社会部記者。

2003年4月運動部記者。

2007年4月須崎支局長。

2009年10月 社会部記者・防災などを担当。

◎コーディネーター



松本 敏郎 さん (まつもと としろう)

黒潮町役場 情報防災課長

1956年生まれ。

1975年旧大方町役場(合併後黒潮町)に入庁。

長さ4kmの砂浜や周辺の自然を美術館と考える「砂浜美術館」設立や黒潮町の地域資源を生かした商品開発を行う「さ・し・す・せ・そ計画」等を通じて、まちおこしに尽力。

第3回「3.11東日本大震災から高知は学ぶ」シンポジウム

テーマ ～被災地を知る。そして、- 事前復興 - を考える。～

2014年2月1日(土)

大方あかつき館

(司会)

(公社)自治研究センター事務局長の津野と申します。本日の司会を担当させていただきます。

さて、2011年3月11日の東日本大震災の発生から、あとひと月ほどで丸3年がたとうとしています。復興庁の1月の公表によりますと、今もなお25万人を越す方が公営住宅や仮設住宅への避難生活を余儀なくされているという状況が続いています。ここ高知県におきましても2012年3月31日に南海トラフ巨大地震の新想定により、皆さんもご存じだと思いますけれども、34メートルもの津波に襲われるという可能性があるという指摘されました。高知県では高台移転の議論など少なからず混乱をきたしている状況があります。これらの高台移転等の議論については、津波被害から逃れるためには必要なことなのかも知れませんが、しかしその前に、私たちにはもっとすべきことがないでしょうか。

そういうこともあり、今回のシンポジウムは、「～被災地を知る。そして、- 事前復興 - を考える～」というテーマでシンポジウムを開催いたします。事例報告・パネルディスカッション等、長時間となりますけれども最後までご協力よろしくお願ひしたいと思います。

それでは報告に入ります前に、お配りしました配布資料の確認の方をさせていただきます。

受付でこの水色の封筒をお配りしたと思います。こちらの中に今日のレジュメが1枚入っています。続きましてカラーの「～被災地を知る。そして、- 事前復興 - を考える～」という、今日のチラシが1枚入っております。こちらの裏面にプログラムがございますので、ご確認をお願いいたします。それともう1枚カラーコピーの用紙ですけれども、パネルディスカッションのパネラー・コーディネーターのご紹介の紙が入っております。

続いて報告の資料になります。まず「避難所運営について」という2枚の資料が一部ございます。その次に「東日本大震災、南三陸町視察資料」というホッチキス止めの資料がございます。続きまして「南三陸町の復旧・復興の状況」という資料があります。続きまして「徳島県美波町由岐湾内地区における事前復興まちづくりの現状と課題」、1枚ものと資料になります。あと最後にアンケート用紙を入れております。皆さんの感想などお願ひしたいと

いうことでアンケートを入れておりますので、ぜひご協力をお願いしたいと思います。もし、不足している資料がございましたら受付の方にお願ひしたいと思います。

それでは早速報告1の方に移りたいと思います。報告をしていただきますのは、宮城県南三陸町役場の三浦勝美さんです。

(会場から拍手)

それでは三浦勝美さんのご紹介をさせていただきます。三浦



勝美さんは1982年に旧歌津町役場（合併後の南三陸町役場）に入庁されております。東日本大震災の際、防災対策庁舎の屋上で津波に襲われるも漂流する畳にのり、引き波で公立志津川病院の3階の窓に瓦礫と共に漂着をされました。流された42人の中で唯一の生還者となっております。被災直後は罹災証明書発行担当などもされて、現在は議会事務局に勤務をされておられます。今日は「被災当時の事実を知る」～奇跡の生還者より～と題して報告をいただきます。それでは皆さんよろしくお願いたします。

報告1

「被災当時の事実を知る」～奇跡の生還者より～

宮城県南三陸町役場 三浦勝美氏

(三浦氏)

どうも、皆さんこんにちは。

(会場からこんにちは)

発表の前にあらためて皆様に御礼を申し上げたいと思います。高知の皆さま、そして黒潮町の職員の皆さま、本当に我々に大変なご支援を頂き、本当に今日まで皆様のご支援で何とか頑張って暮らしてこれたと思います。今日は何とか我々の経験で皆様にご支援頂いたことで、皆さんが南海トラフの地震によって、いろんな心配をされていることに対して、「役に立てないかなあ」という思いで今日は訪問させていただきました。ちょっと本当にそういう不安があるんですけど、何とか当時の状況を、私が体験したことを中心に報告させていただきます。

まず、今日の私が報告させていただく内容なのですが、まず自分がいました南三陸町の防災庁舎のある南三陸町志津川の津波映像を見ていただきたいと思います。そして、その当時の私の流された状況、そして震災後の間近の様子とか、役場の勤務の様子とかそういうお話をさせていただきます。それから、被災を受けた家族の状況やら、その悲しみやら、そしていかに本当に生きていくということが大事なのか等のお話をさせていただきます。それから私のお願いですが、「ライフジャケットを着用していただきたい」という話をさせていただきます。

それでは最初に、発生の当時の話ですけれども、私は町民税務課と言う所におりまして、収納対策室という納税の特別チームをやっておりました。その日々の中で午前中に確定申告のお手伝いをしておりました。午後から、別件がありまして自分だけその収納対策室と言う本庁舎の2階の別室で、一人作業をしていたわけです。その時間帯に地震が来まして、「とうとう来たぞ」という状況で、「この地震は駄目だ」と机の下にもぐりました。机の下は半分物が入っているので厳しい状況で入ったんですけれど、なにせ宮城県では一番古いような木造の本庁舎だったものですから、「これはつぶれるんじゃないか」という思いでした。周りの壁のキャスターとかみんなもう本棚とか壊れてきまして、正直「絶対死なねえ」という電話を実はしてまして、その中で、「もうこれは死ぬかもしれん」と思いました。地震は収まったんですけれど、「さあ、これで今度はどうなるんや」と...

役場は本庁舎があって、そして防災庁舎がまん中であって、そして第2庁舎があります。その第2庁舎の2階で確定申告の受付してたわけです。他のメンバーは受付事務をしておりまして、私は最初の対策室から2階にすぐに出ました。防災庁舎に移って危機管理課は準備に入っているわけですが、それを通り越して今度は確定申告の会場はどうなっているのかと思い見ていたら、町民の皆さんをまず避難させていました。本庁舎では、ちょうど議会の最終日で、最後に町長が挨拶をしている時に地震が来たもんですから、その後に議員さん方も避難しておりました。そして2階に行っ



たり来たりしている間に地震が2時46分、そして49分には大津波警報が発令されました。そして情報収集している状況で、なかなか混乱して逃げるといふ感じにはならなかったです。

ただ他の階の職員はもう避難していたんです。多分私は1階に下がってみんなが逃げている様子を見たら自分も逃げたかもしれないですけど、結構な人間がもう2階の危機管理課、防災対策庁舎の2階にある危機管理課の方に集まってきたものですから、それでこう逃げづらいという感じもあったんです。そしてその危機管理課の情報で30分には雄勝半島に7メートルの津波が到達するというので、それを知ったのが3時頃だったものですから、「これは今から逃げたらちょっとまずいぞ」と内心思ったんですけども、震災のその日を迎える前々から「防災庁舎は津波が来ても大丈夫だ」と言われておりまして、そういうのもあって我々もあそこにいれば大丈夫だという感じだったんです。そして住民の方も遅れて逃げている人があって、そういう人たちも呼んで「駄目だから、ちょっと上にあがって」と呼んだりもして、それでその場所に40何名が集まっていたという状況であります。

そして我々は逃げずに、当時職員のヘルメットも流れてたので、それをかぶって私は防寒着、土方作業着のジャンパーを着て一応避難はしたわけです。まあそうこうしている間に、危機管理課の担当者の「遠藤未希さん」や「三浦毅さん」は亡くなりました。その方々を中心とした上層部メンバーを残して「関係ないメンバーはとにかく屋上に上がれ」と、「避難しろ」というような指示があったので、そこでなったわけです。この後、ちょっと津波映像を見ていただきたいと思います。そこから大体始まりの様子であります。ちょっとご覧いただきたいと思います。

「津波映像（約30分）」

今のような感じで映像を見ていただきました。

上にいると、津波が最初川を上ってきて、私は川沿いの所に柵に座って見てたんですが、最初川が氾濫してきて、木造の本庁舎。大体5秒掛からずに折れ曲がったままぶっ壊れていきました。そして数分の間に全面、波だけという感じで我々取り残されていまして。そして水が防災庁舎の半分以上あがってきた段階で、課長が、「これはもしかしたら上まで来るかもしれない」、「何かにすがりつきなさい」ということで、我々も防災庁舎のアンテナに、私たちに近い所に建っていたので根本にすがっていたんです。そしてあっという間に水が越えてきた。足元にまで水がやってきて、「いよいよ来た」と、私も根本にすがっていました。

そうしている間に今度は強いシャワーが「だあー」と来たんですね。当時私は気付かなかったんですけど、そのアンテナにかなりの人が、みんな固まっています、すぐるところがない。その



映像が写真で残っているんですけど、その映像を見ると私確認できないんです。私が確認できないくらい人数が重なって、それにつかまっていた強いシャワーというのは多分、その人たちがカバーしてくれて、その程度なのかなという状況だったと思います。そして今度は「どーん」と、どんどん水がやってきて。アンテナにすがっておりまして、それも鯉のぼり状態でありました。そしてちょっと指が離れた瞬間に両手を伸ばしたま

ま流されていきました。それをちょっとスケッチしたものがあ
るので、ちょっと見てみたいと思います。なかなかうまく書け
てないですけど、まだ中途半端ですが、ほんともう手を伸ば
した状態でこのアンテナにまだ数名残っている状態で、このま
まこう引き剥がされてしまったという状況です。



そして今度は話の全てを終えてるんですけど、まだ状況が全
然分からなくて、「くちゃくちゃ」になった感じで、もまれて
いる感じで、イメージ的にはサーファーが波うち際でもまれる感じですか？あれが大体30～40秒く
らい続く状況ですね。全然こう海上に上がれないと、何となく海上が少し浮いている感じがあって、
一所懸命水をかくんですけど、なかなか上がらなくて1回水を飲んでとうとう息ができなくなり
もう駄目だと思った瞬間に、こう「ぼーん」と海上に出た感じがするんです。海上に出れば、「は
あはあ」言いながら目の前の材木とか一緒に流されていると、すがるようにするんですけど全然浮
けない。もう立ち泳ぎが大変なんです、荒れている海の中で、立ち泳ぎが首から上を出している
というのは本当につらくて、それでもがいている間に目の前に1枚のベニヤ板がきたんですけど、ま
たこれも駄目で、そうこうしている間に、今度はたまたま斜め後ろを見たら畳がありまして、泳い
でいってその畳にすがったら今度は浮けた。

それでやっとほっと一安心というか、その精神状態としては殺されそうな感じだったのが、ほっ
としたのかこうだんだん怒りが出てきて、「まだ絶対死なねえ」と畳の上でこう連呼していま
した。流される間に必死に、殺されかけた反動で、火事場のくそ力でもないですけど、今度は怒り
が出てきて、体を休められるというのがあって、畳でほっとしながら着いたんです。

だんだん今度は流れがゆっくりになりまして、波が止まったんです。今度は引き波が少しずつ始
まっていくんです。引き波が始まっていて今後どうなるのかっていうのは全然考えてなくて、まず
体を休められるという安心だけで、先のことは考えてない。そして遠い方向を見ていると1人の女
性職員が何かにすがって一緒に流されている。助けを求めていたんですけど何ともできない。そん
な状況で私もメガネをふっ飛ばされていましたので、何か前の方を見たら船がやってくるなど人が
乗った船が、何か近づいてくるなどと思って手を伸ばして助けようと思ったんですけど全然反応がな
い。

それが私の勘違いで実は防災庁舎を通り過ぎて、私は自分が動いているのを勘違いしていたわけ
です。当時そんな感じで流されていこうとしたんですけども、ふと前を見たら、防災庁舎を過ぎま
して、志津川公立病院の3階の下辺りに枯れ木や材木とかすごい量が引っ掛かってまして、どうも
そこにたどり着きそうだと、いっても畳と一緒に流されてそこに着いたんです。今度は2階の窓が
何かに持っていかれそうで、畳も私も引き込まれそうだったんです。「これはやばい」と思いまし
て一瞬見たら、引っ掛かった材木とか駆け上がっていくと3階の窓は耐震防止の斜めの鉄骨があり
まして、ここに上がれば生還できると一瞬で判断しまして、畳を諦めてそのために這い上がってい
って、そして斜めの鉄骨に乗って生還できました。

その時の感情としては、ほっとしているのと、安堵しているのと、津波に怒っているのと、あと
はもう「人生今後何があるか分からないなあ」と思って、「やりたいことやってたらこれは駄目だ」
と、いろんな事を本当にこう脳裏を巡らせていました。これに避難者が、入院患者とか職員もおり

まして、声が聞こえたので大声で呼んで窓から引っ張り上げてもらって志津川病院の患者さんとかと一緒にその夜を過ごしたわけです。疲れはまして、着るものは全部流されて、そして紙オムツさせていただいて、もうあとタオルとかあるもの全部巻いて一晩過ごしたんです。そしてその間も何回か屋上に一緒に避難したりして、一晩津波が何回か来てたらしいです。

まあそれで患者さんでもやっぱり亡くなられていった患者さんもいたらしいです。津波が引いていった、朝の5時頃の状態なんです。私も当時、役場職員として何か手伝わなくちゃいけないと思って着るもの何かないかと思って探してもらった。女性物のピンクの長靴と女性物の水色のズボンと長シャツと、あとはよさこいの^{はっぴ}法被がたまたま赤・黄とか白とか2枚あって、それを着てあと黄色のタオルを巻いて、首にも巻いてすごいド派手な格好に一人だけなっていたわけです。そして午後から消防団の方が助けに来ていただいて、とにかく歩ける人は歩いて避難しろと、津波が来てない方向に逃げましょうということで、瓦礫の間をみんなで歩いて行ったんですけど、その時に志津川病院の方に自衛隊のヘリがやってきて救助してもらいました。

そして小学校の方に避難したんですけれども、とあるおばちゃんが私の格好を見て「これから何をするつもりなの？」みたいなことを言われました。流されているのは自分だけなので、避難所の中で一人変な格好をしているという状況です。2日目はそれで一晩、毛布1枚巻いて寝て、とにかく3日目の朝に「これはとにかく着るものを何とかしなくてはいけない」と思いました。私の地元の歌津地区に家があって多分家は大丈夫だろうと、家に戻れば服はあります。そしてその格好をしたまま朝早くから出かけました。その方が歌津に嫁に出した夫妻がいるということで、その方に乗っけられて3日目の朝に小学校・中学校の方に着いて、嫁さんが小学校の先生だったもんですから、最初に嫁さんに会って、そしてあとは中学校の方で本部の方に、生還できたということで挨拶して、その本部、中学校の体育館には役場の職員の親御さんとかおりまして、「私の息子はどうなりましたか？」とか聞かれたんですけど、「分かりません」という感じで答えたように思っております。

そして、その足で、あと1回家まで歩いて行きました。家の近くまで行くと庭におふくろが居ました。おふくろは当時、私を見て何か遠くから変な格好をした人が歩いてくるということで、「このご時世だからそういう人もいるかな」みたいに思ったらしくて、ただ近づいて行って、これが自分の息子だと特にびっくりしたそうです。まあお互い泣いて再開できている状況であります。そういう状況で1回戻って、また服を着替えて歌津の避難所に行った訳であります。

当時、地元の中学校体育館では、電球もない、もちろん学校が被災し、何も無くてパソコン作業なんかももちろんできないし、地区住民の安否確認、カレンダーの中なんかも貼って名前の列挙して、そして今度はだんだん、3日目ぐらいには食料の配布隊がやってきましたので、その辺の訴えとかやっていたわけです。そしてあと3月末頃には今度は、さすがに体育館の避難会場では、もう衛生上も良くないということで、近くの温泉とかホテルとかその辺に二次避難をするようになったわけです。そういう感じで我々も避難、その他にも避難の方が全て居なくなるわけではないので、まあ避難生活をしてました。自家用車も流されていますし…。

3月末に人事異動の発令がありまして、4月からテニスコートの上の庁舎が機能を開始したわけです。それで自家用車が無くて公用車でみんな乗り合わせて通勤しました。夜遅い場合は迎えが来たり、もちろん電気は不通だし、水道の復旧のめどもありません。飲み物は配給でしたし、食事は炊き出しご飯とか水筒持参で、風呂は自宅で、たまに下にあった自衛隊のお風呂を借りて使ったり

しておりました。

とにかく私も1カ月過ぎると軽自動車を手に入れまして、髪も伸び放題だったもので散髪しました。行く暇がなくて親父が救急で連れていかれて待っている間に、石巻にまで行って坊主にしました。そんな状況であります。そしてそういう生活が4月以降も大変忙しい時期でした。ガソリンも無しに車で、悲しい状況でもあるし、凄まじい住民の方々もやって来ます。そんな中で、4月途中から軽自動車を手に入れまして、1人で通勤するようになりました。そんな中で1人になる時間帯というのが帰りの車を運転する時間帯、10分くらいで家に着くんですけど…。その時に泣けてくるんですね。仕事中国家に帰っても避難者が居たりして、休む所がないんですけど、とにかくその時間帯、1人になった時間帯、亡くなったメンバー（私だけ残してみんな流され）死んでしまったので、それで泣けてきました。この2年半ずっとです。「本当に大変な状況だったなあ」と思いました。

そして4月になり、「罹災証明取らんと」という話になりました。罹災証明というのは本当に大事な証明書類です。家の被害状況、それから家族の被害状況を確定させた紙なんです。その発行が、初日出す地区の方々を全員呼んでしまって大変なパニックが起きました。電気もない、発電機も故障してパソコンも動かないのに、「何のために呼んだ」という状況で、どの町もそういうパニック状態が起きました。ところが正確に発行できないと後々の支援に関わってくる。罹災証明の判定というのは、いろんな支援、義援金の配布、そういうものに本当に大きく関わってくるものです。罹災証明は金券になるという状況で、その担当でしたので、本当に4月、5月、6月は毎日、朝出勤するのもつらい状況でした。自分に関しては東京都の皆さんとか、支援をいただいた状況であります。

そして本当に職場でも長丁場なので、1カ月くらい過ぎてからですね、土、日の1日は休むようにということで、本当に町民に隠れるようにしてパチンコへ行ったんですね、ぐちゃぐちゃの気持ちの中でした。パチンコやりながら死んだやつらのことを思いながら、「こいつらもやりたかったろうな」と思いながら泣けてきて…。パチンコ行く運転中に行きかけて泣けてきます。そんな状況で本当に2年間……そんな感じでした。

そして被災家族の様子なんですけれど、役場職員同士結婚していた未亡人が増えました。あと妻を亡くし失望して早期退職した先輩の職員もいます。それから父親、夫、3人の子どもを亡くして休職してる女子職員もいます。それからもう担当の三浦毅さんの奥さんなんか毎日防災庁舎に訪れるような状況でしたし、子どもに父親の死亡を伝えていない職員もいたようです。本当にその家族に会うのがですね、つらい……。何とか時間を作ってという状況です。しかし、本当に「死んじゃだめだ」ということを感じました。

私の嫁さんの弟も消防士で殉職しましたし、私はかろうじて助かったとしても、私の家族ではそのことが喜べない。私もこれだけ仲間が死んでしまって、助かった今でも一度も喜んだことがありません。本当に、残された家族の悲しみというのは、希望を失ってしまうので、何も考えられないです。前向きになれない。家族が居なくなってしまうと、生きる希望を失うというか、希望をどこに持って行ったらいいかわからない。前向きになれない…。何とか今後のためにですね、生きるということを本当に考えていただきたいなというのは思いました。

死んだ人の気持ちはわからないんですけど、残された家族は悲しんでしまう。家族のためにです

ね……本当に誰かが死ぬと10人以上の人が悲しんでしまうという、皆さんも同じだと思います。家族の大黒柱だったわけですから、その方が亡くなってしまったら、家族はもう大変なことになってしまうので、ぜひ考えていただきたいなと思います。

役場の職員の状況ですけども、1年間大変でした。今年ももちろん大変です。今日発表する及川君もまさに復興推進課の担当であります。精神的にもやられて早くやめてしまう職員もおりますけども、なんとか命を取り留めてれば少しずつ、私も正直精神的にやられていますが、少しずつやっぱり前向きになっている。何とか生活できているなと思います。

そして最後に、“ライフジャケットの準備のお願い”です。なぜ必要か。検死解剖はできていないんですけど、今回の東日本大震災の時の死亡原因は92パーセントが溺死です。溺死ということは水を飲んで死んでしまうこと。いかに呼吸していくのかが勝負だと思うんです。逃げるのはもちろん第一優先なんですけれども、何とかライフジャケットを装備して逃げていただけないかと。津波に流されてもライフジャケットを着てればもっと早く多分上に上がれて窒息することは防げるかなと。それで次の手段、何かにすぎるとか。特に役場の皆さんは、まず先に外に逃げるように話さなくてはいけないし、そんなことで逃げるのが遅くなると思うんです。ですから役場の皆さんには、自分が座っている机の足元を空けてもらって、「ヘルメットとライフジャケット」をぜひ用意していただけないかなというのが私のお願いです。

特に住民の皆さんもそうですけども、とてもあの高い所に逃げるのにも、やはり時間が掛かってしまうので万が一のためにそれをしていただきたいなと思うんですね。本当に息ができるかどうかと……思うので。とにかく流されていて立ち泳ぎしているのが本当に苦しいんです。あれで首から上を出しているというのが本当つらい。そして今回も助かった人って必ず何かしらにすぎているなり、屋根に登ってるなり補助されている…。何もなしで助かった人とかあまりいません。ですから、なるべく浮いていれば良いんじゃないかなということですね。我が町も今は仮設住宅の高い所に暮らしているんで、我が町もライフジャケットを用意する人はもういないかもしれない。でも私は車にも積んでありますし、ちょっと遅ればせながら家族にもあるんです。いざ遊びに行ったとき、例えば気仙沼に遊びに行ったときとか、もし津波が来るとなったときに車が動けなくなったら、すぐ付けて逃げれるような感じで一応準備はしています。

何とか、万全の準備をしていただきたい。今回四国の皆さん、高知の皆様には、本当に我々南三陸町の人間はご支援をいただきましたので、そうした縁でいろいろ関係者の皆様にお会いすることになりました。何とかこの町、そして高知の皆さんに、ほとんど助かってもらうような感じにしたいだけないかなという、それを考えていただきたいと思うんです。本当に「死んでは駄目だ」ということで、何とか死なない対策を取っていただきたいと。それで全て私の報告とお願いということで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

(会場から拍手)

避難所運営について

「志津川高校の事例」

【震災直後】

○志津川高校避難者等

志津川高校全職員30人程度 + 高校生30人程度

特別養護老人ホーム+社協デイサービスセンターからの避難者50程度

施設隣接行政区からの避難者300人程度

志津川高校 隣接行政区 食糧等支援物資供給対象人数 1,500人

○デイサービス裏山から高校へ老人の搬送

デイサービス等が浸水し、老人が濡れた状態で避難したため肺炎及び低体温により10人程度が翌日までに死亡した。

※食糧がなくとも死亡することはないが、油の混じった泥水を飲み肺炎になりやすく、又津波で濡れて低体温になって死亡することが想定されるので、その対策も必要と思料する。

高校教員の機転により校庭にSOSを書いたことにより、県警ヘリ?+消防ヘリ?+自衛隊ヘリ?により重体患者の緊急搬送を震災翌日に開始することができた。

※患者のヘリコプターによる搬送先及び転送先の情報が全くもって把握されておらず、身内の方からの問い合わせに回答することができなかった。⇒ 改善の余地がある。

○避難者サバイバル生活の開始

道路はがれきにより埋もれ通行できず、外部の連絡の取れない、電気も水もないサバイバル生活が始まった。

食糧は皆無、寝具は保健室用の5セット程度、懐中電灯が数本、ろうそくが10本程度である。

校庭の片隅に穴を掘って簡易トイレを作るチームと隣の行政区に炊き出しの要請に向かうチーム老人の看護の当たるチーム等に区分し、活動を開始したが、雪が降る様な天候で暖房を取る必要があるほど寒い状況で灯油もない状況であった。

当日深夜には避難者に対し、おにぎり等を配ることができた。

炊き出しは、3日程度で米が底を尽き終了となった。

その後は逆に、拠点避難所から隣接行政区に対する食糧等の搬送・配給が始まった。

○ヘリコプター飛来

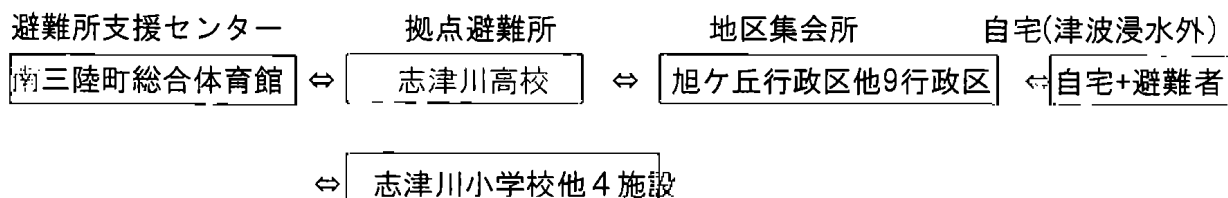
陸路通行が可能になったのは震災後5日程度後だったので、それまでの期間はヘリ頼みであった。

ヘリコプターは、県警・消防・自衛隊護衛艦ひゅうが・米空母から飛来するもので、その飛来の目的も様々であった。

患者搬送、支援物資の問い合わせ、支援物資の搬送等を確認し、避難者全員で対応した。

米軍ヘリの対応については、高校教頭が英会話により対応し、その後ペーパーによりおこなった。

【避難所全体のフローチャート】



ライフラインの復旧 水道 ⇒ 8月下旬飲用可能(6ヶ月)

電気 ⇒ 5月末通電(3ヶ月)

【避難所開設及び運営】

○避難所活用施設

合宿所 ⇒ 本部・受付・食道(非難者で食堂経営者に無償委託)・風呂(合宿所風呂に自衛隊よりお湯を供給していただきかぶり湯として避難者及び隣接行政区の方に提供した)

※避難所にいる限り衣食住+医療には困らない。しかし、それぞれローンの支払とか生活必需品の購入など現金が必要になり、震災から一か月もすると職場復帰が始る。

食道調理人+配膳スタッフを町で雇用し、不公平が生じない対策を講じた。

第一体育館 ⇒ 食料品等拠点避難所物資格納庫 + 自衛隊宿泊場所

第二体育館一階 ⇒ 避難者生活スペース

第二体育館二階 ⇒ 衣料品等格納庫

○避難所の所掌業務(主に役場職員が従事した)

・避難所施設の案内

・安否確認の対応 ⇒ 遺族の安否確認希望者に対応

※他の拠点施設の避難者リストについて手書きにより共有した。

今後電子データ共有による対応をできればベスト

陸路はがれきで埋もれ自動車は使用できず、歩いて移動する手段しかない。

・マスコミ等の受付、対応

・ボランティアの受付、依頼業務の確認

- ・隣接行政区からの要望(物資も含む)への対応
- ・南三陸町総合体育館への要望物資の申請
- ・避難者及びスタッフからの要望への対応
- ・各種行事の案内(問い合わせへの対応) ⇒ 土日になると炊き出しの支援がある。
- ・物資の搬入搬出作業 ⇒ 避難者+自衛隊+ボランティア(震災後3ヶ月以降)
- ・食品以外の物資の隣接地区への計画的搬出 ⇒ 志津川高校が二学期より授業開始し、第一体育館を使用できなくなるので片付けが必要
- ・各種申請書等の受付と内容の説明
- ・医療スタッフとの連絡調整(施設確保など)
- ・班長、医療スタッフ、自衛隊、本部スタッフとの連絡会議 ⇒ (毎日8:15～)
- ・来客への対応

○自衛隊による後方支援

志津川高校では、震災後5日程度後から始まり、30人規模で給水・炊事・輸送・入浴等の支援をいただいた。

給水 ⇒ 隣接登米市より搬送

炊事 ⇒ 高校避難所+隣接行政区避難者に配布できる分量を炊飯

輸送 ⇒ 南三陸町総合体育館より搬送される物資を第一体育館に搬入
第一体育館にストックした物資について体育館避難者及び隣接行政区に配布

入浴 ⇒ 合宿所風呂にお湯供給(午前10時ころより夜間まで対応可能)

※炊飯に余力があることを確認し、給湯の依頼をした。

○神戸医療チームの支援

震災直後拠点避難所に医師+薬剤師+2名のスタッフが4日交替で3ヶ月程度在沖していただき、避難者のケアをしていただいた。

※避難にあたり非常持ち出しのリストに「お薬手帳」もいれておくと安心です。

※医療チームは、自分達の食糧は持参して下さっていた。⇒こちらで提供した。

【その他】

○ネットによる支援物資の依頼

市街地壊滅により変電所が流失し、通電までに3ヶ月を要し、電気のない非常に不便な生活を強いられ、パソコン及びネットが使用できない状況になる。

仮設電源によりネットを復活させ、**支援物資の要望を行うと必要量以上に大量に送致**される状況であった。的確な情報発信の方法を検討する必要がある。

東海・東南海・南海地震が想定されている地域においても、同様の事態が想定されるので、事前の準備が必要と思料されます。

○非情持ち出しについて

南三陸町役場庁舎は、巨大津波により壊滅的な被害を受け、基礎部分しか残らなかった。

そのことに伴い、**紙ベースデータ及び電子データが全て流失**し、バックアップもなかったことからほとんどのデータ流失という事態を招いた。

他の自治体におかれては、非常持ち出し若しくは、金庫の整備などを十分に行っていたら、データのバックアップできる環境整備を行っていただければ、幸いである。

○想定外

宮城県沖地震を想定し、防災対策庁舎を建設し防災関係の中枢場所とし位置づけていたが、想定を上回る巨大津波の襲来により施設が破壊された。

津波襲来時に避難喚起を促した防災無線による広報活動はかなりの効果があったものと思料するが、今回の震災発生時、津波対策本部になっていた施設に参集した職員が犠牲になった。

その大半が中堅職員及び管理職であり町の復興を考えた時、相当の損失となってしまった。

自治体最大の財産は人材であり、東日本大震災級の巨大津波が襲来した場合においても、それを失うことの無い様な、避難を第一に考慮した職員配備計画が必要であると思料する。

東日本大震災の襲来により、L1（数十年から百数十年に一度の頻度で発生する津波）対応からL2（東日本大震災級の巨大津波）対応へと考え方が変化したと考察できる。

従って、過去の歴史を紐解き想定外を想定することが、肝要と考える。

○備蓄しておくべき物資

別紙 避難所運営参照

- ・避難所滞在期間は、最長 5 ヶ月程度
- ・プライバシー保護の観点から、段ボールの間仕切り若しくはテント。

・ガスボンベ発電機

※燃料は、十分確保できる。

- ・ソーラーランタン
- ・ノロウイルス発生防止の観点から、消毒薬及び使い捨てトレイ。
- ・食器にかぶせるビニール袋(洗浄不要)

東日本大震災

南三陸町視察資料

平成25年7月31日 現在

南三陸町災害対策本部

●南三陸町本庁の位置 東経141°27'01" 北緯38°40'29" 海拔1.67m
面積 163.73km²

●人口、世帯

平成17年国勢調査人口 18,645人 5,335世帯
平成22年国勢調査人口 17,431人 5,295世帯
平成23年2月末現在 17,666人(男8,655人 女9,011人)・・・a
5,362世帯
平成25年3月末現在 15,066人(男7,392人 女7,674人)・・・b
4,831世帯
△14.71%(△2,600人)・・・b/a(%)

<南三陸町の防災対策>

●過去の地震・津波災害被害

明治29年 6月15日(1896) 明治三陸地震津波
マグニチュード8.5 流出家屋487戸、死者1,240人

昭和8年 3月3日(1933) 昭和三陸地震津波
マグニチュード8.1 流出家屋67戸、死者87人

昭和35年 5月24日(1960) チリ地震津波
マグニチュード8.5 流出家屋319戸、死者41人

昭和53年 6月12日(1978) 宮城県沖地震
マグニチュード7.4 当町被害なし

●想定した宮城県沖地震(2005.1.12発表)

発生位置/宮城県の牡鹿半島の東北域
地震規模/マグニチュード7.5程度
発生可能性/30年以内の発生確率 99%

●災害救助法適用基準

町の滅失世帯が50世帯以上のとき。

●津波浸水域予測

県では、「地震被害調査」をこれまでに昭和59～61年度(第1次)、平成7～8年度(第2次)、平成14～15年度(第3次)の3度行っている。第3次地震被害想定調査において、津波浸水域予測をあわせて実施した。

- ・津波想定のための想定地震
宮城県沖地震の単独及び連動に加え、昭和8年の昭和三陸地震を想定した。
- ・津波想定結果
宮城県沖地震(単独)・・・構造物あり、満潮位

	津波最高水位	浸水面積	20cm津波の到達時間	最高水位の出現時間
旧志津川町	2.3m	1.1km ²	16.9分	25.9分
旧歌津町	1.9m	0.3km ²	16.3分	24.6分

宮城県沖地震（連動）・・・構造物あり、満潮位

	津波最高水位	浸水面積	20cm津波の到達時間	最高水位の出現時間
旧志津川町	6.7m	2.4km ²	25.4分	34.5分
旧歌津町	6.9m	1.2km ²	23.9分	33.4分

●防災計画上の応急仮設住宅建設用地（平成18年4月1日現在）

番号	用地名称	土地面積（m ² ）	備考
1	くろしおグラウンド	10,739	
2	志津川小学校校庭	15,956	
3	志津川中学校校庭	24,140	
4	入谷小学校校庭	7,322	
5	入谷中学校校庭	3,418	
6	戸倉中学校校庭	9,585	
7	荒砥小学校校庭	2,451	
8	清水小学校校庭	3,965	
9	伊里前小学校校庭	7,141	
10	名足小学校校庭	6,221	
11	歌津中学校校庭	9,536	

●防災計画上の障害物の集積場所

志津川公民館	志津川字汐見町 120	16,312 m ²
魚竜館前	歌津字管の浜 194	3,544 m ²

●防災計画上の遺体一時保存所

志津川公民館	志津川字汐見町 120	300体
歌津公民館	歌津字伊里前 100	100体

●防災活動配備・動員体制

・津波警戒本部（0号配備）

町内において震度4以上の地震を観測した場合、危機管理課を中心に家屋等の倒壊情報の把握及び津波予警報の情報収集を行う。

・津波災害警戒本部（1号配備）

「津波注意報」が発表されたとき、自動的に津波災害警戒本部を設置する。

・津波警戒対策本部（2号配備）

「津波警報」が発表されたとき、自動的に津波警戒対策本部を設置する。

・津波災害対策本部（3号配備）

津波警報「大津波」が発表されたときには、自動的に津波災害対策本部を設置する。

<東日本大震災の被害概要>

●東北太平洋沖地震津波災害概要

- ・発生日時 平成23年3月11日14時46分頃
- ・震央地名 三陸沖（北緯38度、東経143.9度 牡鹿半島の東約130km）
- ・震源の深さ 約24km
- ・規模 マグニチュード9.0
- ・最大震度 震度7（栗原市） 南三陸町震度6弱
- ・津波 最大波3.3メートル以上（石巻市鮎川：15時20分）
仙台管区気象台では観測レベルを超えたため、これ以上観測不能

●最大余震

- ・発生日時 平成23年4月7日午後11時32分
- ・震源地名 宮城県沖（北緯38.2度、東経142.0度、牡鹿半島の東約40km付近）
- ・震源の深さ 約40km
- ・地震の規模 マグニチュード7.4
- ・震度 震度6弱（栗原市築館、若柳）
震度5強（南三陸町）
- ・津波 平成23年4月7日午後11時34分津波警報
平成23年4月8日午前0時55分津波警報解除

●南三陸町災害対策本部設置等

- ・平成23年3月11日午後2時46分 地震発生
緊急地震速報受信、震度6弱を記録
- ・平成23年3月11日午後2時46分 南三陸町津波災害対策本部を防災対策庁舎に設置
- ・平成23年3月11日午後2時49分 気象庁大津波警報発令
津波到達予測・津波の高さ 午後3時、6m
職員3号配備（勤務時間内対応）
- ・平成23年3月11日午後2時50分 気象庁発表、石巻市鮎川に津波到達予想午後3時10分
- ・平成23年3月11日午後3時25分頃 大津波襲来、南三陸町沿岸域壊滅
波高は防災対策庁舎付近で15.5m
遡上高19.1m（歌津）
- ・平成23年3月12日午後1時00分 町長ベイサイドアリーナに津波災害対策本部を移設
第1回災害対策本部会議を開催
- ・平成23年3月13日午前7時30分 津波注意報に切り替え
- ・平成23年3月13日午後5時58分 津波注意報解除
- ・平成23年3月26日午前9時 テニスコートに仮設庁舎を設置し、津波災害対策本部を移設
- ・平成23年度中にスポーツ交流村多目的広場に仮庁舎完成予定。

●災害対策本部会議

- ・3月12日～ 毎日午後7時に開催
- ・3月30日～ 毎日午後6時30分に開催
- ・5月1日～ 毎週月、水、金の午後6時30分に開催
- ・5月27日～ 午後5時30分に開催
- ・7月1日～ 毎週木曜日の午後5時30分に開催
- ・10月～12月7日 毎月第1木曜日の午後5時30分に開催し、12月7日で終了した。

●東日本大震災被害状況（H23/12/31現在）

・建物被害（概数）

戸倉地区	526戸
志津川地区	2,048戸
入谷地区	8戸
歌津地区	729戸
計	3,311戸

南三陸町全体の住宅被害

・全壊、流失…	3,142戸
・大規模半壊…	94戸
・半壊……………	75戸
計	3,311戸

・人的被害（南三陸町に住所を有する者）（H25/7/31現在）

死者	525名	警察発表	死者	567名
行方不明者	220名		行方不明者	221名
計	745名		計	788名

●ライフラインの被害

- ・水道・・・一部地区の仮通水（飲用不可）より開始し、8月中旬ごろにはほぼ飲用可能となった
- ・電気・・・4月中旬より復旧が始まり5月末に完了（被災を免れた戸倉・荒町地区除く）

●町職員について

・平成22年4月1日現在職員数	一般行政職（町長・副町長・教育長等含む。）	245名
	病院職員（参考）	107名
	計（参考）	352名
・平成23年4月1日現在	一般行政職	233名
	再任用	2名
	新規採用	4名
	死亡・行方不明職員	△ 36名
	計	203名

●防潮堤、防災対策庁舎の高さ等

- ・防潮堤・・・5.5～5.6m（チリ津波の最大波高5.5m）
- ・防災対策庁舎・・・12m（屋上）、平成7年度8千万円の事業費で建設
同時に防災行政無線設備（アナログ方式）を3億4,500万円で整備（旧志津川町）

●水門・陸閘門

漁港・・・	水門18基、陸閘門59基、ゲート7基
河川・・・	水門9基（動力・遠隔操作）
農地海岸・・・	陸閘門21基
計	水門27基、陸閘門80基、ゲート7基 合計114基

●防災行政無線（デジタル方式）

・同報系

親局（役場）	1基	簡易親局	1基
中継局（十二曲峠）	1基		
再送信局（名足、鍋倉、信倉）	3基		
子局（パングマスト）	105基（うち43基破損）		
簡易親局	1基		
戸別受信機	5,700基（H22.12.20完成）		

・移動系

親局（役場）	1基	簡易親局	1基
中継局（十二曲峠、田東山）	2基		
車載型	55基		
携帯局	51基		

●南三陸町指定避難所・場所のうち津波指定避難所・場所

・志津川地区津波指定避難所

- ①南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナ
- ②志津川小学校
- ③志津川中学校
- ④志津川保育所
- ⑤ボランティアセンター
- ⑥廻館老人憩いの家
- ⑦旭ヶ丘コミュニティセンター
- ⑧中瀬町文化センター
- ⑨小森センター
- ⑩田尻畑あさひ館
- ⑪新井田地区公民館
- ⑫林生活センター
- ⑬袖浜生活センター

(7カ所被災)

・志津川地区津波指定避難場所

- ①上の山都市緑地
- ②東山公園
- ③大森高台
- ④志津川小学校高台
- ⑤ボランティアセンター高台
- ⑥大久保高台
- ⑦公立病院屋上
- ⑧志津川漁協屋上
- ⑨スポーツ交流村
- ⑩松原住宅屋上

(5カ所被災)

・前後浜地区津波指定避難所

- ①袖浜生活センター
- ②平磯生活センター
- ③荒砥保育園
- ④荒砥生活センター
- ⑤細浦生活センター

(3カ所被災)

・戸倉地区津波指定避難所

- ①戸倉中学校
- ②西戸生活センター
- ③荒町ふれあいセンター
- ④水郷生活センター
- ⑤津の宮生活センター
- ⑥滝浜生活センター
- ⑦寺浜生活センター

(4カ所被災)

・歌津地区津波指定避難所

- ①上沢部落集会所
- ②葦の浜公会堂
- ③歌津中学校体育館
- ④伊里前小学校体育館
- ⑤津龍院
- ⑥泊浜生活センター
- ⑦馬場中山生活センター
- ⑧名足小学校体育館
- ⑨石浜部落集会所
- ⑩田の浦漁村センター
- ⑪港親義会館

(5カ所被災)

●被災した公共施設等

・志津川地区

- ①行政第1庁舎、行政第2庁舎、防災対策庁舎
- ②志津川保健センター
- ③南三陸町ボランティアセンター
- ④南三陸町ディサービスセンター
- ⑤志津川公民館
- ⑥南三陸町図書館
- ⑦荒砥保育園
- ⑧海浜高度利用施設
- ⑨公立志津川病院
- ⑩南三陸町地方卸売市場
- ⑪南三陸町上下水道事業所
- ⑫南三陸町街なか交流館
- ⑬袖浜地区漁業集落排水処理施設
- ⑭本浜公園
- ⑮松原公園
- ⑯上の山緑地
- ⑰せせらぎ公園

・戸倉地区

- ①戸倉小学校
- ②戸倉保育所
- ③戸倉公民館
- ④自然環境活用センター
- ⑤波伝谷地区漁業集落排水処理施設

・歌津地区

- ①歌津総合支所
- ②歌津保健センター
- ③名足小学校
- ④南三陸町水産振興センター

●被災した漁港施設

・2種漁港

- ①志津川漁港
- ②波伝谷漁港
- ③伊里前漁港

④泊漁港 4港

・1種漁港

- ①寺浜漁港
- ②長清水漁港
- ③藤浜漁港
- ④滝浜漁港
- ⑤津の宮漁港
- ⑥水戸辺漁港
- ⑦折立漁港
- ⑧平磯漁港
- ⑨荒砥漁港
- ⑩清水漁港
- ⑪細浦漁港
- ⑫葦の浜漁港
- ⑬寄木漁港
- ⑭館浜漁港
- ⑮稲淵漁港
- ⑯ばなな漁港
- ⑰石浜漁港
- ⑱田の浦漁港
- ⑲港漁港

19港

●被災した公営住宅

- ・志津川地区
 - ①新井田A～G
 - ②大森A、C
 - ③御前下
 - ④松原
 - ⑤小森
- ・戸倉地区
 - ①折立
- ・歌津地区
 - ①町向
 - ②枅沢
 - ③北の沢
 - ④第2北の沢

●南三陸町消防団

- ・条例定数 630名
- ・現員数
団長、副団長5名、分団長12名、副分団長12名、班長55名、団員490名 計575名
- ・女性団員9名
- ・平均年齢39歳
- ・自動車ポンプ3台、小型動力ポンプ積載車45台、小型ポンプ8台
- ・被災状況
4名殉職、自動車ポンプ3台、小型動力ポンプ積載車14台、小型動力ポンプ6台、ポンプ車庫3カ所

<各種団体等からの復旧支援・応援状況>

●物資輸送支援

・搬送トラック

登米市トラック	2台
自衛隊トラック	3台
埼玉県ボランティアのトラック	3台
町内ボランティアのトラック	2台
計	10台

・搬送先（拠点施設）

- ①自然の家
- ②歌津中学校
- ③志津川小学校
- ④志津川中学校
- ⑤志津川高校
- ⑥入谷公民館

●宮城県緊急消防援助隊

- ・指揮支援隊・・・京都市
- ・都道府県隊・・・京都府、鳥取県、兵庫県、秋田県

●他県市町からの派遣応援職員受け入れ状況

〔平成 23 年度中の短期派遣〕

- ・宮城県
- ・宮城県教育委員会
- ・宮城県仙台市
- ・宮城県大和町
- ・宮城県富谷町
- ・宮城県大崎市
- ・宮城県加美町
- ・宮城県栗原市
- ・宮城県登米市
- ・宮城県南自治体
- ・北海道本別町
- ・北海道鹿追町
- ・北海道帯広市
- ・秋田県
- ・秋田県秋田市
- ・山形県
- ・山形県内市町村
- ・埼玉県蓮田市
- ・埼玉県新座市
- ・東京都
- ・東京都世田谷区
- ・東京都荒川区
- ・東京都北区
- ・東京都文京区
- ・東京都台東区
- ・東京都葛飾区
- ・富山県富山市
- ・愛知県東三河 8 市町
(豊橋市, 豊川市,
蒲郡市, 田原市,
設楽町, 東栄町,
豊根村, 新城市)
- ・三重県
- ・三重県鳥羽市
- ・兵庫県
- ・関西広域連合
(兵庫県, 鳥取県,
徳島県)
- ・鳥取県町村会
- ・阪神支援チーム
(西宮市, 宝塚市,
川西市, 猪名川町)
- ・香川県
- ・愛媛県松山市
- ・高知県
- ・高知県高知市
- ・熊本県
- ・熊本県熊本市
- ・鹿児島県伊佐市

〔平成 23 年度自治法派遣〕

- ・宮城県
 - ・宮城県登米市
 - ・神奈川県横浜市
 - ・神奈川県川崎市
 - ・神奈川県三浦市
 - ・愛知県豊橋市
 - ・兵庫県
 - ・兵庫県西宮市
 - ・兵庫県宝塚市
 - ・兵庫県川西市
 - ・長崎県南島原市
- 11 団体 23 名

〔平成 24 年自治法派遣〕
H24. 4. 1 現在

- ・宮城県
 - ・宮城県登米市
 - ・宮城県加美町
 - ・山形県庄内町
 - ・東京都世田谷区
 - ・東京都葛飾区
 - ・神奈川県川崎市
 - ・神奈川県三浦市
 - ・神奈川県茅ヶ崎市
 - ・愛知県豊橋市
 - ・愛知県田原市
 - ・愛知県大口町
 - ・長野県原村
 - ・兵庫県
 - ・兵庫県西宮市
 - ・兵庫県宝塚市
 - ・兵庫県川西市
 - ・兵庫県たつの市
 - ・兵庫県三木市
 - ・兵庫県南あわじ市
 - ・鳥取県南部町
 - ・長崎県南島原市
 - ・宮崎県都城市
 - ・宮崎県日向市
 - ・鹿児島県伊佐市
- 25 団体 42 名

〔平成 24 年自治法派遣〕
H24. 10. 1 現在

- ・宮城県
 - ・宮城県登米市
 - ・宮城県加美町
 - ・宮城県大衡村
 - ・山形県庄内町
 - ・埼玉県新座市
 - ・東京都世田谷区
 - ・東京都葛飾区
 - ・東京都
 - ・神奈川県川崎市
 - ・神奈川県三浦市
 - ・神奈川県茅ヶ崎市
 - ・愛知県豊橋市
 - ・愛知県田原市
 - ・愛知県大口町
 - ・愛知県豊川市
 - ・愛知県新城市
 - ・長野県原村
 - ・兵庫県
 - ・兵庫県西宮市
 - ・兵庫県宝塚市
 - ・兵庫県川西市
 - ・兵庫県たつの市
 - ・兵庫県三木市
 - ・兵庫県南あわじ市
 - ・兵庫県洲本市
 - ・兵庫県豊岡市
 - ・鳥取県南部町
 - ・鳥取県日吉津村
 - ・長崎県南島原市
 - ・佐賀県多久市
 - ・宮崎県都城市
 - ・宮崎県日向市
 - ・鹿児島県伊佐市
- 34 団体 61 名

〔平成 25 年自治法派遣〕
H25. 4. 2 現在

- ・宮城県
 - ・宮城県加美町
 - ・宮城県大衡村
 - ・宮城県登米市
 - ・宮城県栗原市
 - ・山形県庄内町
 - ・埼玉県新座市
 - ・千葉県八千代市
 - ・東京都世田谷区
 - ・東京都葛飾区
 - ・東京都
 - ・神奈川県川崎市
 - ・神奈川県茅ヶ崎市
 - ・神奈川県三浦市
 - ・長野県原村
 - ・三重県鳥羽市
 - ・愛知県大口町
 - ・愛知県新城市
 - ・愛知県豊橋市
 - ・愛知県豊川市
 - ・愛知県幸田町
 - ・愛知県三股町
 - ・愛知県田原市
 - ・愛知県蒲郡市
 - ・兵庫県
 - ・兵庫県西宮市
 - ・兵庫県宝塚市
 - ・兵庫県豊岡市
 - ・兵庫県洲本市
 - ・兵庫県川西市
 - ・兵庫県篠山市
 - ・兵庫県たつの市
 - ・兵庫県南あわじ市
 - ・鳥取県南部町
 - ・鳥取県日吉津村
 - ・佐賀県多久市
 - ・長崎県南島原市
 - ・宮崎県日向市
 - ・宮崎県都城市
 - ・鹿児島県伊佐市
- 40 団体 81 名

●海外からの支援受け入れ状況

- ・ニュージーランド (3/16~18) 救助隊52人
- ・オーストラリア (3/16~19) 救助隊75人
- ・イスラエル (3/29~4/10) 医療団53人

●陸上自衛隊活動実績

西部方面支援隊

・給水実績 (t)

3月 (18日~31日、14日) . . .	143 t
4月 (30日)	629 t
5月 (31日)	556 t
6月 (1日~26日、26日)	247 t
計 101日	1,576 t (平均 15.6 t/日)

最大給水日 5/3	29.6 t
最小給水日 6/24	5.7 t

・炊事実績 (食数)

3月 (19日~31日、13日) . . .	102,950 食
4月 (30日)	217,795 食
5月 (31日)	87,671 食
6月 (1日~26日、26日)	30,549 食
計 100日	438,965 食 (平均 4,390 食/日)

最大提供日 3/28	10,830 食
最小提供日 6/13	570 食

・輸送実績 (t)

3月 (21日~31日、11日)	85.8 t
4月 (30日)	123.2 t
5月 (31日)	155.4 t
6月 (1日~26日、26日)	77.9 t
計 98日	442.3 t (平均 4.5 t/日)

最大輸送日 5/21	16.7 t
最小輸送日 5/30	1.1 t

・入浴実績 (ヘイサイドアリーナ会場人員)

3月 (21日~31日、11日)	4,435 人
4月 (30日)	21,671 人
5月 (31日)	17,855 人
6月 (1日~26日、26日)	10,814 人
計 98日	54,775 人 (平均 559 人/日)

最大入浴日 5/10	873 人
最小入浴日 3/22	176 人

<被災者支援・復興計画について>

●災害復旧・復興対策（震災復興推進課所管）

・災害復旧計画

町は、被災後の住民生活の安定と生活環境の整備を効率的に進めるため、必要に応じて災害復旧に関する基本方針及び災害復旧計画を速やかに策定し、実施する。

・災害復興計画

町は、被災後速やかに災害復興に関する基本方針及び復興計画を策定し、計画的な復興事業を推進する。

●災害救済制度（保健福祉課）

・災害弔慰金

町は、災害弔慰金の支給に関する条例（平成17年南三陸町条例第99号）に基づき、自然災害により死亡した者の遺族に対し、災害弔慰金を支給する。

支給額／配偶者、子、父母、孫、祖父母

支給額／生計維持者が死亡した場合・・・500万円

その他の者が死亡した場合・・・250万円

・罹災証明の発行（町民税務課）

記載事項／申請人住所、氏名、生年月日

罹災物件等名

罹災月日、罹災場所、罹災内容、その他

・税等負担の軽減

町民税、固定資産税、国民健康保険税、介護保険料、後期高齢者医療保険料の徴収猶予及び減免等

・被災者生活再建支援金（生活関係経費）の支給

被災者生活再建支援法に基づく。

・被災者生活再建支援金（居住関係経費）

住宅が全壊した世帯が新築等をする場合、複数世帯200万円（単数世帯150万円）

・就学援助

町は、被災を受けた児童・生徒にかかる給食費、学用品等について就学援助による助成を実施。

●仮設住宅建設状況

期	団地名	戸数	入居日
第1期	横山1期	59戸	4月29日
	自然の家	81戸	5月9日
第2期	吉野沢団地	84戸	5月11日
	志津川小学校グラウンド	60戸	5月10日
第3期	志津川中学校グラウンド	102戸	5月10日
	志津川高校グラウンド	58戸	5月26日
第4期	平成の森	246戸	6月1日
	伊里前小学校	37戸	6月6日
第6期	歌津中学校	37戸	6月6日
	入谷中学校	32戸	6月6日
	戸倉中学校	67戸	6月20日
第7期	入谷小学校	18戸	6月17日
	葦の浜農村公園（第1期）	18戸	6月22日
	南方イオン跡地（1期）	200戸	6月11日
	中瀬町（1期）	20戸	7月30日
	港	44戸	6月22日
	水戸辺	18戸	6月23日
	神割崎キャンプ場	31戸	6月23日

第8期	林(椿山亭)	12	6月24日	
第9期	平磯地区(1期)	17	7月3日	
	大久保地区(1期)	9	7月3日	
第10期	中瀬町(2期)	42	7月30日	
	横山2期	22	7月8日	
	馬場地区	21	7月4日	
第11期	田茂川	16	7月4日	
	韭の浜農村公園(2期)(平松)	6	7月28日	
	泊浜地区(1期)	23戸	7月28日	
第12期	名足地区	34戸	7月21日	
	岩沢	38戸	7月29日	
	津の宮	20戸	7月26日	
	大久保地区(2期)	7戸	8月12日	
	荒砥(1期)	30戸	8月4日	
	袖浜	33戸	8月12日	
	泊浜(2期)(田の頭)	7戸	7月28日	
	保呂毛	11戸	8月12日	
	桜沢	16戸	8月4日	
	田尻畑	12戸	8月10日	
	荒砥(2期)(平貝)	44戸	8月12日	
	第13期	館浜(町発注)	15戸	8月4日
		廻館(1期)(町発注)	35戸	8月11日
		寄木(砂浜)	10戸	8月12日
枅沢		38戸	8月11日	
第14期	小森	48戸	8月12日	
	細浦	18戸	8月12日	
	中瀬町地区(3期)(竹川原)	10戸	8月10日	
	中山	8戸	8月12日	
	童子下	17戸	8月12日	
	切曾木(西戸)	18戸	8月10日	
	平磯(2期)	10戸	8月12日	
	沼田(1期)	40戸	8月12日	
	波伝谷	21戸	8月12日	
	童子下(2期)(中の町)	12戸	8月12日	
	中瀬町(4期)(竹川原②)	10戸	8月12日	
	沼田(2期)	20戸	8月12日	
	山の神平	28戸	8月末	
南方町イオン跡地(2期)	151戸	8月12日		
横山幼稚園跡地	24戸	8月12日		
若者総合体育館	30戸	8月12日		

・合計

確定戸数2, 163戸+県分32戸=2, 195戸(H23/8/31すべて完成)

(司会)

はい三浦さん、どうもありがとうございました。緊迫した津波の映像から始まり被災当時のご自身の体験、そしてご自身の体験談をお話をいただきました。そして発生から1年間役場での仕事の状況など、そして同僚を亡くされた大変つらいお話だったと思いますけれども、報告をいただきました。どうもありがとうございました。

皆さんの方からご質問等あるかと思えますけれども、質問はのちほど一括してお受けしたいと思います。

それでは報告をいただきました三浦さんに最後の拍手でお礼に代えたいと思います。

(会場から拍手)

それでは引き続きまして報告2に移りたいと思います。報告をいただきますのは、宮城県南三陸町役場の及川貢さんです。

それでは及川さんをご紹介します。及川貢さんは1996年に旧歌津町役場(合併後の南三陸町役場)に入庁されております。住宅行政に長く携わっておられまして、震災直後は応急仮設住宅、現在は南三陸町内に770戸の建設予定の災害公営住宅整備の業務を担当されております。被災者の一日も早い安定した住まいの確保に向けて日夜奔走されております。この報告2では「復旧・復興の状況と、今を知る」と題してご報告をいただきます。それでは及川さん、よろしくお願いいたします。

「復旧・復興の状況と、今を知る」

宮城県南三陸町役場 及川 貢 氏

(及川氏)

皆さんこんにちは。

(会場からこんにちは)

宮城県南三陸町・復興事業推進課の及川と申します。今日はよろしくお願いたします。まず私からも震災後の高知県の方々からのご支援、この場をお借りしまして感謝を申し上げます。ありがとうございます。高知の方がたくさん被災地に、南三陸町に来ていただきましたし、こちらからも多くのご支援をいただきました。おかげさまというか、震災から3年目を間もなく迎えようとしておりますが、被災地は今少しずつですが確実に復興の歩みを進めているところです。私たちも被災後3年間仕事をしてきましたけれども、今も南三陸町役場の中には全国からの、自治体からの応援の職員の方85名が90名ぐらい来ていただいています。そういった方たちが居なければ、私たちも地元の職員もここまでこの3年はもたなかったですね。ちょっとそれは想像できなかったという思いがしております。



今日、そういった形で復旧・復興の状況について少しお話をさせていただきます。昨日、高知に着きまして少し桂浜とか、あるいは今日、黒潮町の海とかも見させていただきました。同じ太平洋なんですけれども、三陸地方はどっちかというリアス式海岸で、入江が極めて、こちらの海に比べると狭い。昨日から今日、こちらの海を見させていただいたんですが、すごく広がってパノラマのような感じで見えてきました。津波のこともあって、震災後はあまりこう私自身も海に対して前向きな感じではなかったんですけども、高知の海を見てですね、「でかい海はいいな」としばらくぶりにそういう思いをいたしました。



その三陸地方はリアス式海岸で、地形に沿った形で国道が伸びていて、全部こうカーブの連続のような道路が続いているんですけども、今その国道の隣側に三陸縦貫自動車道という高速道路が整備されています。これは事業化してから30年くらいたつんですけども、今全体の計画の6割とか7割くらいで南三陸町とか気仙沼市辺りは、まあ一番整備が遅れている所です。ただ震災の時に災害復旧車両とかそこを通ったり、あるいは三陸道の道路の方に津波の時に駆け上がって被災を免れたりといった形で命の道としてですね、非常にクローズアップされたこともあって、南三陸町もその三陸縦貫自動車道の工事が進められています。

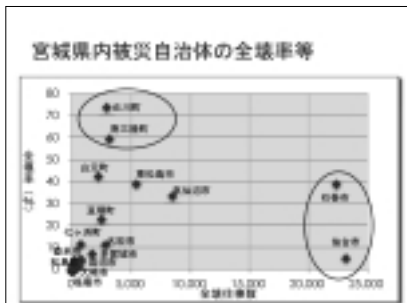
去年の前半くらいまでは、町の復興事業があまり住民の方に目に見える形で、進んでいなかったもんですから、見ようによ

っては「国の事業、高速道路の事業は全部進んでいるのに町の事業は一体どうした、いつになったら始まるんだ」という叱咤激励を住民の方から頂戴いたしまして、私たち職員は、肩身の狭い思いを感じておりました。去年の中頃から、ようやく高台移転とかあるいは災害公営住宅、複数の個所で造成工事が始まりまして、住民の方も遠目に見える形で、そのような状況にあったものでから、少しずつ安心していただいているのかなという感じがしています。一日も早く、今仮設住宅に住んでいらっしゃる被災者の方を次の住まいへ入らせるために、今、私ども一生懸命頑張らせていただいているところです。

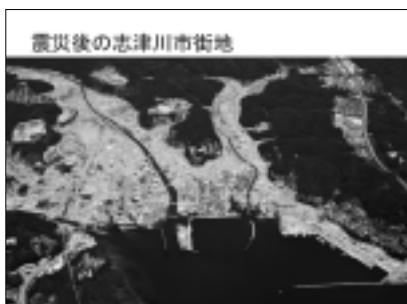
それからちょっと資料に沿った形で、次に復旧の過程とこの現在の状況について、お話をさせていただきます。概要が入ってますが、まず「被害状況の概要」です。建物被害については全壊・流出が3,000戸を超えています。大規模半壊と半壊を合わせると3,321戸ということで全人口の62パーセントの住宅が、何らかの被害を受けているといった形です。それから、人的被害は死者・行方不明者を合わせると745名ということで、これは全体の4.2パーセントにあたる数字になっています。



こちらは「宮城県内被災自治体の全壊率と全壊住棟数」を自治体別にグラフにしたものです。縦軸がそれぞれの自治体の全住戸に占める全壊の割合、それから横軸に全壊の住棟数となっています。石巻市や仙台市などは大きな市ですので20,000戸以上の住宅が全壊になっている。一方で左上の方にありますけれども、女川町・南三陸町は小さな町で全壊の戸数は3,000戸くらいなんですけれども、全壊率については60パーセントを超える割合になってまして、いわゆる町が壊滅したという町、女川町と南三陸町はそういった感じがこの表からも見てとれるかなと思います。



これは、先ほどちょっと津波の映像でありましたけれども、南三陸町で一番大きい市街地、志津川地区の震災前の航空写真です。ここには町の全体の戸数の3分の1にあたる1,800戸がこの写真の中に、という形で密集しておりました。これが震災後の志津川市街地です。10分とか15分の間にもう全て1,800戸の住宅が消えてしまったという形になります。先ほど津波の映像で川がありますけれども、こちらの川は八幡川という所です。これをずうっと津波が上っていきまして、もちろん、海に近い所でもたくさんの方が犠牲になられたんですけれども、この写真の、左上左隅の所の大森地区という集落は、海岸から3キロ、4キロくらい離れています。そこの方は「もう、ここまで来ないだろう」ということで、あまり避難しなかった。ここから多くの犠牲者が出てしまっているという状況です。ちょっと乱暴な言い方をすると、残っているのは高台にある志津川小学校・志津川中学校・志津川高校、それから現在、役場仮庁舎を置いて



ております、ここ商工団地という所です。まあ大体この4カ所くらいが、残っているという感じになっています。

この高台の三つの学校には今、仮設住宅がそれぞれ100戸ほどありまして、校庭の半分くらいを使っているといった状況です。町が整備した「仮設住宅の概要」です。全部で58団地、2,195戸を整備いたしました。特徴的なのは小さい町の割には、団地の数が多いということと、それから町外、隣接している登米市の方に全体の戸数の4分の1弱の仮設住宅を整備しているということです。一番先にできた仮設住宅も町外ですし、一番戸数の多い仮設住宅も町外にあります。被災者は仮設住宅とあと今回は民間アパートを借り上げて、それを仮設住宅扱いにするという、まあ、「みなし仮設住宅」というのに今入っているわけです。みなし仮設住宅については、町内ではほとんどアパートとか全て無くなっているみたいであまりありませんので、町外あるいは県外、全国に散らばって今、仮設住宅ということで準備をしているような状況です。

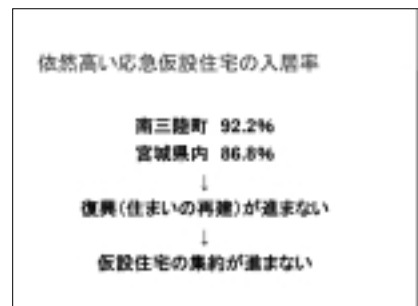
こちらは仮設住宅の2団地の写真です。先ほどちょっと話しました町外にある一番規模の大きい先に挙げた仮設住宅という団地です。それから右側は入谷小学校という所にある仮設住宅です。それぞれ、課題がある。こちらは登米市と言う所に、まあ比較的近い病院もあったり便利施設も近くにある。ところが既に入居した時点では将来的にはもちろん町に戻ってくるというつもりでこちらに入ったんですけども、やっぱり1年経って、2年経ってそういう時間の経過と共に、やっぱりこっちの生活の方が便利だということで、登米市の方に住宅を建ててここに住みたいという方も多くいらっしゃいます。それから小学校、学校の方の仮設については、これ比較的規模の少ない中学校なんですけれども、中学校でも校庭の半分くらい使っているんです。これがなかなか、進まないという状況の中で、まだ小学校から仮設住宅が撤去することができない。子どもたちの方に少し不安な面が出ているような状況が続いています。



仮設住宅の概要

仮設住宅			みなし仮設住宅(民間賃貸住宅)	
団地	戸数	人口	戸数	人口
南三	52	1,700	4,737	66
町外	6	480	1,352	682
計	58	2,180	6,089	748

(平成22年1月現在)



その仮設住宅の集約も、当初は例えば3年後ぐらいには学校施設・町外施設の数、仮設住宅は集約をしていこうという計画はあったんですけども、現在の仮設住宅の入居率は南三陸町で92.2パーセント、宮城県内でも86.8パーセントで「依然高い入居率」を維持しています。これはもちろん、復興が進まない住まいの再建が進まないとい

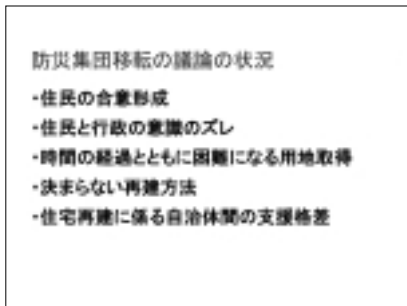
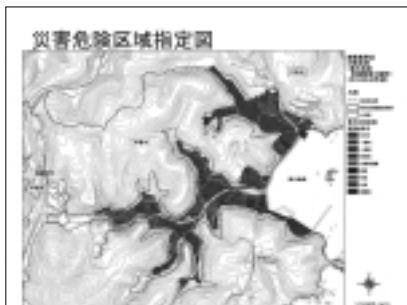
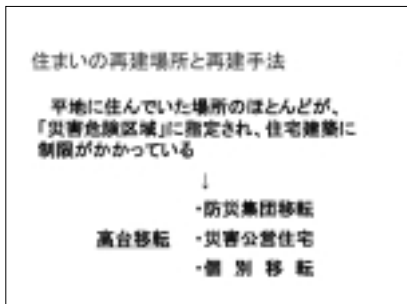
った理由が大きくなっております。仮設住宅を出た後の「住まいの再建場所と再建手法」についてなんですけれども、これは従前住んでいた平地、自分たちが住んでいた家の土地というのは、ほとんど全て災害危険区域というのに指定されていまして、住宅が残っている場合は補修とかはできるんですけれども、新たに住宅を建築するということができないことになっています。このため高台

移転とかいうことになっていく訳なんですけれども、高台移転の中の、まあそれぞれ被災者はいろいろのことを考えて、この大体三つの中から、選んでいくことになります。

「防災集団移転」は町が土地を整備して、そこに被災者自身が家を建てていく。それから「災害公営住宅」は被災者のための公営住宅。それから最後に「個別移転」というのは自分で土地を見つけて自分の土地に家を建てていく。中にはもちろん、例えば県外とかの息子さんの所や、親戚の所に避難をして、そのまま町に帰らずそこで生活をしていっている方も決して少ない数字ではありません。これが先ほどお話しました災害危険区域の指定図となっております。寄木地区という所の災害危険区域の指定図です。ちょっと見にくいかもしれませんが、この外の部分の点線が津波の浸水区域です。その中に色を付けているもの、これが災害危険区域となっています。例えば、この辺りは従前宅地ではありませんので。畑とかそういった場所があって、大体あの本当に町内でも9割以上の所が災害危険区域として指定されているという状況です。この寄木地区で言うと、その高台移転、この集落で30戸以上がその防災集団移転という制度を利用して高台移転をするわけなんですけれども、この辺りに今、造成工事をしているところです。

防災集団移転って町内でどのくらいあるのかっていうことですけれども、この赤丸で示した所が防災集団移転の事業個所です。町内で28カ所。今、ほとんど全ての所で造成工事が行われている最中です。もう町の中は土埃とかで、車のガラスが汚くなるといったような状況です。その防災集団移転ですが、もちろん、役場と住民との合意形成を目指して進めていきます。行政と住民がうまく噛み合う集落もあればそうでない所もあって、合意形成に1年以上掛かる所もありますし、そういった意味です。なかなかこの合意形成というのが本当に大変な作業になってきます。

あと用地所得というのが、時間の経過と共に非常に困難になってくるケースがあります。震災直後はみんな被災者だということで、比較的、町に協力しますという声が多かったのですが、1年たって2年たって、その時間が経過するごとに難しくなっ



てきている、そういった問題があります。被災者がいろいろ先ほど言った防災集団移転だとか災害公営住宅、そういった選択肢から最終的に一つを選ぶのですけれども、今3年目を迎える中、実際、防災集団移転に参加しようか、災害公営住宅に入居しようか、そういったところでまた考えられている被災者もいます。

これは「防災集団移転、初の竣工」ということで藤浜団地（P32下の写真）こちらは10区画の竣工式が昨年12月21日（平成25年）に行われました。県内でも完成した団地というのは多くはないんですけれども、山を切り開いて造成して完成したというところでは、この団地が宮城県内で初めての団地ということになります。

次に「災害公営住宅の概要」についてですが、災害公営住宅は被災者の意向を確認するのが、大変な作業です。一昨年の10月の段階では町内で930戸整備をしようとしており、昨年の夏に行った仮申し込みとは、その数が減って770戸ということで整備計画を見直しました。これは災害公営住宅の場合は、最終的に空きが出ると国に補助金とか返すようになってしまいますので、恐らく今は770戸という数字はあるんですけれども、また来年にもう1回確認をすとか、そういう作業が少し続いて行くことになると思います。

災害公営住宅の団地で先行している2団地の様子です（右上から2番め）。どちらも造成工事が終わりましたして建築工事に移っており、躯体工事の最中です。これは今年の7月竣工で、8月の入居開始予定を目指して今工事が進められているところです。

今度は、低地部はどうなっているのかということになりますけれども、これは最初に見ていただいた志津川市街地の計画です（右下から2番め）。ちょっと大ざっぱに言うと、この青い部分が高台移転、災害公営住宅とかも入った高台移転の土地になります。それから緑の部分は復興記念公園、防災庁舎の位置がここで計画しております。それから、この黄色い部分については観光ゾーン、商業ゾーン、それから水産加工の施設とか、そういった計画をしております企業だとか、あるいはショッピングセンターというかそういった誘致を進めているんですけれども、ここが本当にその計画どおりに埋まっていくかということは、ちょっと不安があります。新しく震災後にできた商店とか、あるいはコンビニとかは、この辺に固まって出店しておりますので、こちらの方にこれからも商店とかが落ち着いていくのかなと思います。

企業の方、例えばショッピングセンターとかは、従業員は教育できても、お客さんを津波の時に避難させる自信はないとか、そういった意見が主に聞かれます。

これは町内3地区、大きな団地の中で作られているまちづくりといった様子です（右下）。志津

災害公営住宅の概要
整備目標戸数の推移

平成24年度		平成25年度	
団地名	整備目標戸数	団地名	整備目標戸数
大森	91	大森	91
塩田	33	塩田	33
伊達	—	伊達	90
伊達東	90	伊達東	90
志津川東	170	志津川東	281
志津川中東	170	志津川中東	150
志津川西	120	志津川西	90
計	800	計	770



川地区、歌津地区、戸倉地区でそれぞれ「まちづくり協議会」を立ち上げまして、住民の合意形成を図っております。

それから昨年の12月からその市街地の部分で、今かさ上げの工事が始まっております（左上）。これはそれぞれの高台移転で今造成している所の土を町の中に持って来ているという状況です。



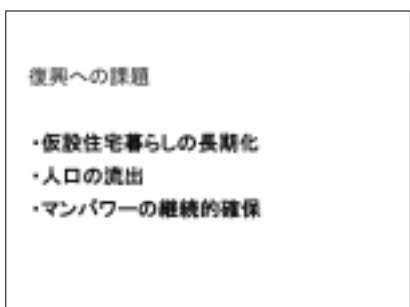
こちらの右に見えるのが防災対策庁舎です。で、今ここですね、この高さが6メートルか7メートルくらいまで盛ってきて、ちょっと見にくいですが、ここに看板があります。最終的にはこのラインまで盛り土をしていくといった状況です。仮に防災対策庁舎が残った場合でも防災対策庁舎の2階、3階の途中くらいまでこの盛り土が高くなっているといった状況です。こちら辺も全部盛り土にかさ上げをしていく予定になっております。



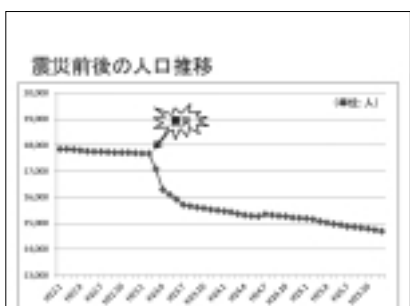
水産はホタテとか、カキとか、ワカメとか、随分回復しております（左上から2番め）。農地の方も災害復旧事業ということで、除塩をして新たに土を入れて、このように今立派な田んぼ、畑になっていくところです。ただこういうふうに整備はしましたけれども、農家は機具とかも流されておりますので、また畑に手を付けられる状況ではないという所が多いといった状況です。



それから町の事業ではありませんが三陸縦貫自動車道、これは志津川の町の中にもうそろそろ入ってくるといった状況です。平成27年度に南三陸町まで距離をのばします。それから鉄道は気仙沼線、全て線路が流されておりますので、今「BRT」と言っってバスで代行をして運送をしております。従来の鉄道の所は全て、今はアスファルトをして、その上を専用道路ということでこのバスを走らせる計画となっております。将来的に鉄道が再開するのかと言うと、それは何とも言えないところです。



ざっとこんな感じで見てきましたけれども、「復興への課題」ということで一般的に言われているのは、この三つがあると思います。仮設住宅暮らしが長期化します。今、3年目ですけれども、志津川市街地の高台移転があと3年から歌津の方で5年後くらいになってしまうので、仮設住宅で6年、7年居ることになります。生活不活発病とか、そういったことが危惧されますけれども、今、町ではそれぞれの仮設住宅に被災者支援、支援員さんを配置してですね、初期対策を継続しているところです。それから人口の流出なんですけれども、この中に震災があって、こんな感じで人口が減ってきております。今、住基上は14,700人くらいなんですけれども、実際住民票を変えてなくて町外に移住されている方が、かなりの数いますので、実



際住民が南三陸町にどのくらい残っているのかというと、多分13,000とかそのくらいの数字になる。

それからこちらは、「震災前後の予算規模の推移」です。震災前は町で74億円でしたけれども、平成24年には355億円、平成25年には792億円と。これはあくまで当初予算の推移なんですけれど。平成24年については、ここから補正、補正ということで最終的には1,000億円を超えています。平成25年度も1,000億円を超えているような状況です。震災前から比べると15倍とかそのくらいの規模に予算が推移しているのが分かります。

それから全国の自治体からの支援職員がこのような感じで増えております。今現在は、多分90人弱くらい居るとしています。来年は、町はこれの倍、150人を要請しております。私たち町の職員にとっても、本当に仕事のピークがいつなのかということが全く分からないんですね。本当にこれがまたもう一度山があるのか、ピークが分からないまま仕事をしているような状況です。この辺が課題でありますけれども。もう一つ、課題の一つに挙げられると思いますけれども、やっぱり東北とそれから南三陸町の反省からまず始めないといけないのかなと、個人的には思っています。

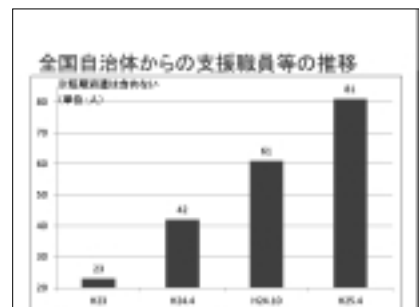
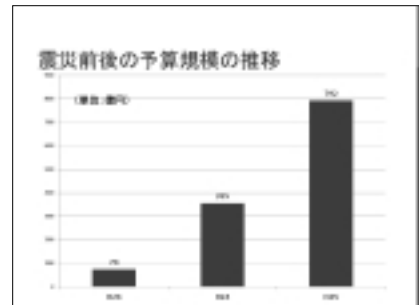
明治三陸から始まって大体40年、50年の間で実際このくらいの津波が来ている。1,000年に1度と言われますけれども、規模的には1,000年に1度だったのかもしれませんが、明治三陸大津波に関しても、今の東日本大震災の津波とそう規模は変わらない津波が来ているような状況です。明治三陸大津波については、震度2から3くらいの揺れが少し長く続いて、それで津波がどっと押し寄せたということが記録されておりますが、実際被災地の南三陸町の住民は、それが分かっている方はそう多くはいません。大きな地震が来て逃げればよかったというような感じでありますので、過去の地震とか津波、もう一度見直してみてそこからまたスタートしていければと思います。町は今、復興事業が最優先でなかなか防災対策まで手が回らないといった状況がありますけれども、私個人的にはここからもう1回スタートを切らなければいけないのかなと、そう思っております。

このような課題がいろいろある中で、間もなく震災から3年目を迎えます。私たちも1日も早く、被災者が終の棲家に住むために、またこれからも一生懸命頑張っていきたいと思いますので、またいろいろ高知の皆さんからもご指導いただければ、ありがたいと思います。今日はありがとうございました。

(会場から拍手)

(司会)

及川さん、どうもありがとうございました。まずですね、今回高知に来ていただいて高知の海を



- 東北、そして南三陸町の反省
- ・明治三陸大津波(1896)
 - ・昭和三陸大津波(1933)
 - ・チリ地震津波(1960)
 - ・東日本大震災(2011)
 - ・ ? ?

見て少し和んでいただいたと、言っていたただけでも高知に来ていただいて良かったなと感じました。そして報告では防災集団移転への議論という状況から復興への課題、仮設住宅の暮らしが長期化しているだとか人口の流出といった課題についてご報告をいただきました。それでは皆さん、最後の拍手で及川さんにお礼に代えたいと思います。どうもありがとうございました。

(会場から拍手)

徳島県美波町役場の浜大吾郎さんです。

浜さんをご紹介します。浜さんは1995年に旧由岐町役場(合併後の美波町)に入庁されております。1998年から10年間、町の防災担当を務め、2009年からは水産振興の担当をされておられます。まず、民間で2004年から地元の自主防災組織の事務局に就任し、防災まちづくり活動を通じて地域の持続可能性の向上を模索しておられます。今回の報告3では、「事前復興を模索する取り組みを知る」と題して報告をいただきます。それでは浜さん、よろしく願いいたします。

(会場から拍手)

「事前復興を模索する取り組みを知る」

徳島県美波町役場 浜 大吾郎 氏

(浜氏)

ただ今、ご紹介をいただきました美波町役場の浜大吾郎です。実は高知大学出身で、今回高知に呼んでいただきまして、また帰ってきました。どうぞよろしくお願いいたします。私は地元
の自主防災組織に所属しておりまして、昨年度から仲間たちと
共に、地域防災力の向上はもとより地域の持続可能性を高める
ために、事前復興まちづくりにとりこんでおります。本日はそ
の活動の現状と課題などについてお話させていただきます。

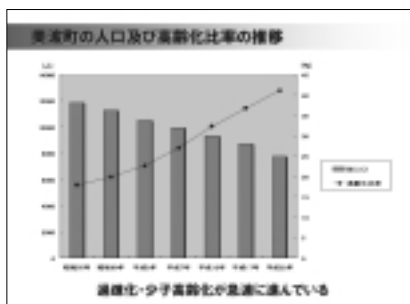
まず私の町ですが、徳島県の南東部に位置しております。皆
さん、美波町ってあまり分かりませんか、合併してできた町
なんですけれど。こちら左側に映っているのが、「ウェルかめ」
のマスコット・キャラクターの「かめっ太」くんって言うんで
すが、ウェルかめの舞台地にもなりました。突然ですけど問題
です。ウェルかめの主人公は誰でしょうか？1番と思われる方、
手を挙げてください。2番と思われる方、3番と思われる方、
ありがとうございます。4番と思われる方、あ、受け狙いです
か？ありがとうございます。みなさん結構ご存じですね。1
番、ああ違う、違う、3番ですね。「倉科カナ」さんです。グ
ラビアのFカップアイドルですごく有名なんですけどね、ちな
みにウェルかめは朝の

NHKの連続テレビ小説の
至最低の視聴率だったそ
うです。マイナスの結果を
残しております。

続いてこれが私の町、美
波町由岐地区になります。
海と山に囲まれたわずかな

平地に住宅が密集するいわゆる漁村集落です。美波町の人口は
平成22年度の国勢調査によりますと7,765人で、昭和55年の人
口を基準にしますと30年で約34.6パーセントも減少しており
ます。また高齢化比率は年々高くなる一方で今後さらに、過
疎・高齢化が進むと予測されております。

また私の町、美波町は過去の南海地震によって、破壊と再生



とを繰り返してきた町でもあります。ご覧いただいております「^{こうりやく}康暦の碑」は1361年の正平南海地震の被害者の供養碑と伝えられております。実はこれが現存する日本最古の津波碑と言われておりまして、それが私の町にあります。また昭和21年12月に21日に発生いたしました昭和南海地震では地震発生約12分後に津波が町を襲い、死者9人、流出家屋は43戸におよびました。昭和南海地震の体験者の多くは現在70歳から80歳以上となっておりますが、今もなお土地の中でその被災体験を聞くことができます。

続いて私の町の被害想定について説明させていただきます。東日本大震災以降、内閣府や徳島県から最新の科学的知見に基づきまして、何度も公表されました。恐らく高知県も同じだと思います。平成23年度には徳島県がまず暫定値を公表しその後、内閣府から公表されました。

続いて平成24年度は内閣府から8月29日に美波町イコール最大津波高24メートルというのが出ました。こちら黒潮町は34メートルですね。24メートルというのはですね、徳島県内では最大となっております。現在、私の地区では徳島県が10月31日に出了ました最大12.3メートルという数字に基づいて対策を行っております。そして今年度のかかなり深刻な想定が公表されました。特に徳島県から公表されました美波町の死者数なんですけど、2,400人亡くなるという、これは人口の31パーセントにあたります。こういうショッキングな数字も出されました。しかし、この衝撃的な数字なんですけど、地域の中ではあまり反響は聞かれませんでした。恐らく度重なる被害想定公表と想像がつかないことの大きな数値で住民の皆さんは恐らく「またか」とかいう感じとかするから「もうなるようにしかならん」というような思いになっているのだらうと思います。

これが私の地区の浸水予測図です。地区のほとんどが10メートル以上浸水すると予測されております。そしてさらに悪いことに、実は浸水エリア外にですね、この辺りには、ほとんど公共施設がありませんので被災後住民は野営するか、もしくは山を越えて他の町に避難するしか生き延びる方法はないだらうと思います。

次に私たちの自主防災組織の活動についてご説明いたします。東日本大震災の以前は、私たちは



東日本大震災以降における南海トラフ巨大地震の被害想定等の概観

平成23年12月21日 徳島県津波高暫定値

被害想定が、国が10月31日、最大津波高暫定値5.0mに暫定津波高を半減した。沿岸浸水口の最大浸水深 7.3m

平成24年10月31日 内閣府 南海トラフ巨大地震による被害想定・津波高(第1次報告)

美波町の最大津波高 19.5m

東日本大震災以降における南海トラフ巨大地震の被害想定等の概観

平成24年7月10日 内閣府 南海トラフ巨大地震の被害想定(中間報告)

平成24年10月29日 内閣府 南海トラフ巨大地震の被害想定(浸水想定、第2次報告)及び被害想定(第1次報告)

美波町の被害想定 / 最大津波高 浸水範囲 1km以上 24.70m 最大津波高 24m

被害想定被害想定 / 全世帯数 約 13,000世帯

被害想定被害想定 / 死者数 約 22,000人 (浸水想定被害)

被害想定被害想定 / 約 19,000人 (津波被害)

平成24年10月31日 徳島県津波高暫定値

最大津波高 9.0m 沿岸浸水口の最大浸水深 10.0m

沿岸浸水口の最大浸水深(時間) 20min/12分、最大津波高 12.3m

平成24年10月10日 内閣府 南海トラフ巨大地震の被害想定(第2次報告)

東日本大震災以降における南海トラフ巨大地震の被害想定等の概観

平成24年10月29日 内閣府 南海トラフ巨大地震について(最終報告)

全世帯被害想定 / 死者は約9千人、避難者100万人(避難所は、被害想定2013の内閣府報告より約半以上)に拡大

被害想定 / 浸水想定被害 / 約 13,000世帯

被害想定 / 浸水想定被害 / 約 13,000世帯

被害想定 / 浸水想定被害 / 約 13,000世帯

被害想定 / 浸水想定被害 / 約 13,000世帯

平成24年10月21日 徳島県 南海トラフ巨大地震による被害想定(第1次)

被害想定 / 最大津波高 7

被害想定 / 死者数 約 4,000人(人口の約21%)

被害想定 / 避難者数 約 60万人(浸水想定) 約 80万人

被害想定 / 約 3,000世帯(約17%)



防災の地域づくりのシーズとして捉えておりまして、防災と地域が抱える潜在的な課題と組み合わせて楽しい防災活動を実施してきました。その例を二つ紹介いたします。まず一つ目が変わったタイトルになっていますが、「まじめな出逢い系～ぼうさいAMOUR～愛する人を守るために」というサブタイトルまで付いておりまして、こういうことをやっております。このイベントはですね、防災訓練を通じて男女が出会います。男女が交流することでまた元の防災意識の向上はもとより若者の出会いの場作りといたします。今はやりの婚活ですね、婚活の防災版を行っております。

第1回目の時は県内から24人が参加して、実施内容は私たちが普段やっているような防災活動をやってもらいました。こちらが心肺蘇生講習を行っている様子で、こちらが出会い仲良く応急手当講習を行っている様子です。過去に2回開催しましたが、カップルも6人誕生いたしました。ただ総合リサーチによりますと、全て別れておりました。ゴールインしたカップルはゼロでした。

二つ目に紹介するのが「バンブーシェルターの製作」です。これは地域の剰余資源、余った資源である「竹」、それから「間伐材」を使ってですね、災害時要援護者を優先的に収納できる小屋を自分たちで作ってみようということでチャレンジしました。大の大人がですね、5人くらい掛かって10日間で作りました。こんな感じで作ったんですけど。避難所生活をしてもっと、もっとじゃないですけど、何もせずに避難所生活をするよりも、地域の中で何か体を動かしながら役に立てないかなという発想でこういうことをやっておりました。でもこれも半年くらいしますと、雨漏りとそれとシロアリが来まして、大体半年くらいで壊さざるをえなくなりました。こんな楽しい活動を東日本大震災以前は行っておりました。しかし東日本大震災以降、私たちが今までやってきた活動がいかに不十分であるかということを感じ知らされました。

由岐湾内の沿岸部の住民はですね、美波町に南海トラフ巨大地震が起きれば24メートルの大きな津波がやって来るといって、片寄った理解をしております。高齢者は特に地震・津波に対する諦め感がまん延いたしました。そして特に若い人たちは津波の来ない所に引っ越したいということで、就学・就職、最近では特に結婚を機にですね、沿岸部から転出する動きがよく見られます。私たちはこれを「震災前過疎」と呼んでおりまして、



目的

- 防災訓練を通じて男女が交流
- 若者の防災意識の向上
- 若者の出会いの場づくり

参加者
徳島県内の地産若者24人(うち男性13人、女性11人)

実施内容

- 防災訓練(心肺蘇生)
- 心肺蘇生講習
- 応急手当講習
- 非常食ランチ
- クロスロード
- 婚活ゲーム



バンブーシェルターの製作

目的

- 剰余資源の活用活用
- 災害時要援護者対策
- 緊急避難住宅建設/ハウスの維持

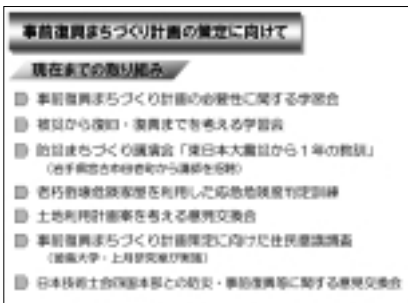
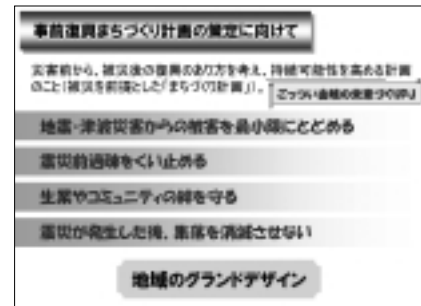
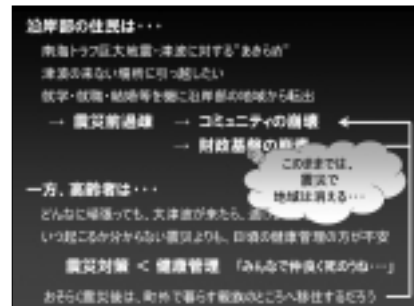
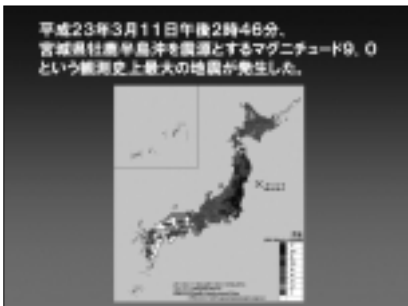


この震災前過疎がどんどん進みますとコミュニティが崩壊していきます。そして私たち行政から見ますと財政基盤の崩壊にもなっていきます。

また一方、高齢者はどんなに頑張っても大津波が来たら逃げようもない。またいつ起こるか分からない震災よりも日頃の健康管理の方になるので、もう諦めている人も多くあります。よく聞かれるんですけど、町中で「もうみんな仲良く死のうね」ということをよくおっしゃっている方がおりました。恐らく震災後は、もし助かったとしても、町外で暮らす親族の所へ移住するだろうと思いますので、そうなるさらなるコミュニティの崩壊につながっていきます。このままでは本当に震災で由岐の地域は消えてしまうかもしれません。そうならないために、私たち由岐湾内の防災組織が連携しまして現在、「事前復興まちづくり計画」の策定を行っております。

この事前復興まちづくり計画とは、災害前から被災後の復興の在り方を考えて持続可能性を高める計画のことで、一言でいうと、「被災することを前提としたまちづくりをやっていきましょう」ということです。この事前復興まちづくりという言葉は、本当に聞きなれないので、何か私たちの言葉に置き換えようということで、役員さん方から提案してもらいまして、現在「ごっつい由岐の未来づくりプロジェクト」という名前で私たちは活動を行っております。この、ごっつい由岐の未来づくりプロジェクトによって新津波被害からの被害を最小限にとどめることができ、そして震災前過疎をくい止め、なりわいやコミュニティの絆を守り、震災が発生したのち集落を消滅させないことができるだろうと、私たちは信じて活動をしております。いふなれば地域のランドデザインにできないかと思って、私たちは活動を行っております。

今迄やってきたとりくみをざっと出します。平成24年の1月から活動を始めまして、いろんな活動を行ってきました。このとりくみには実は徳島大学さんが深く関わっておりまして、昨年7月に美波町と連携協定を締結し、現在美波町の役場の3階に「徳島大学・美波町地域づくりセンター」というのを開設しまして、そこを拠点に官・学・民が連携を強化しております。ちなみに彼が駐在員の井若君です。今日、本当は来たがってたんですけど、ちょっと論文の制作で非常に忙しくて来れませんでした。



では具体的に未来づくりプロジェクトにおいて何をやってきたのか、簡単にご説明いたします。まず、記念すべき第1回目は先ほども申し上げましたように24年の1月に行いましたが、この中で東日本大震災の復旧・復興状況や、それから事前復興まちづくり計画の必要性について住民の皆さんにご説明いたしました。

続いて第2回目は南三陸町の馬場・中山地区の復旧・復興の記録番組を鑑賞し、その後、参加者全員で「今後の防災活動について何をやっていこうか」というのをアイデア出しを行いました。「ぼうさい夢リストづくり」というのを作りまして、いろんな意見を出してもらいました。この夢リストの中には高台移転や、それから復興基地を作るなどの意見がありまして、少しずつ事前復興を意識した考えが浸透していきました。

続いて第3回目では東北の岩手県宮古市から講師をお招きし、「東日本大震災からの1年の教訓」と題して講演会を行いました。講演の中では津波の恐ろしさはもちろんのこと、復興計画の策定には期限が限られておって、期限内に間に合わすためには、なかなか住民の意見を反映できなかったことを教えていただきました。そして震災前から震災後の復興計画を模索しておくことの必要性を教えていただきました。

第4回目は徳島県の建築士会さんと共同して「応急危険度判定訓練」を行いました。この応急危険度判定訓練というのは、震災が発生したのち建築士等の専門家が被災住宅を回りまして、住宅に引き続き住むことができるかどうかを判定する協議のことですが、今回はもちろん、私たちの地域は被災しておりませんのでどうやったかと言いますと、老朽した空き屋を、被災した住宅と見立てて訓練を行いました。


第5回目は南海トラフ巨大地震による新想定に関する説明会を行い、そしてその後、東北の被災地における土地利用計画から、由岐湾内の「土地利用計画を考える」と題して、土地利用計画案の素案を話し合いました。なぜここで今、土地利用計画を考えるのかという意義なんですが、東北の被災地の事例を考えますと復興の妨げとなる問題を事前に解決し、そして復興に掛かる時間を最低2年、最長4年短縮できるだろうと思ひまして、このような土地利用計画を考えております。

ごっつい地域の未来づくりプロジェクト

記録簿へ記入

第1回 H24.1.14


【内容】
 ・助産事業計画策定の準備の進捗状況
 ・津波定規検査の結果報告
 ・東日本大震災の復旧・復興状況
 ・事前復興まちづくり計画の必要性



ごっつい地域の未来づくりプロジェクト

第2回 H24.3.3


【内容】
 ・被災から復旧・復興までを考える学習
 ・ワークショップははじかれ、夢リスト作り



ごっつい地域の未来づくりプロジェクト

第3回 H24.4.20

【内容】
 ・防災まちづくり講演会
 「東日本大震災からの1年の教訓」
 講師：北里平高宮古市職員 吉水 誠 氏



ごっつい地域の未来づくりプロジェクト

記録簿に記入された

第4回 H24.6.30

【内容】
 ・応急危険度判定訓練へ参加（建築士会様主催）
 ・ぼうさいタウンウォッチング




ごっつい地域の未来づくりプロジェクト

より学びの場を
 広げたい

第5回 H24.11.8~10

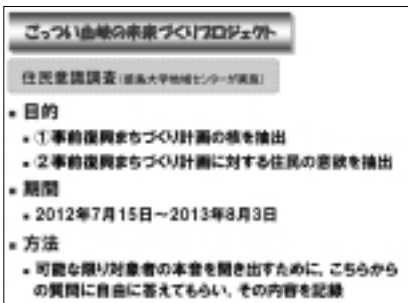
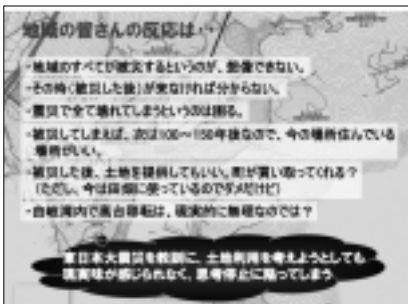
【内容】
 ・南海トラフの巨大地震による新想定全般
 ・津波避難アンケート調査結果報告（岩手県民会館）
 ・東北被災地における土地利用計画から、由岐湾内の土地利用計画を考える



今、土地利用計画を考える意義

- 復興の妨げとなる問題を事前に解決しておく
- 復興にかかる時間を最低2年、最大4年短縮できる
 - ① 建築規制がかけられているから
 - ② 移転先の候補地が決まらないから } 1年
 - ③ 住民の合意形成が進まないから
 - ④ 移転先が保安林に指定されているから } 1年
 - ⑤ 移転先に文化財が埋まっているから } 1年
 - ⑥ 土地造成の工事に約2年かかるから } 2年

まず建築規制は今のところ掛かっておりませんが、短縮には関係ありませんが、移転先の候補地がなかなか決まらない、そして3番目の住民の合意形成が進まないというのを被災前から行っておくことによって1年は短縮できると思っております。そして移転先が、例えば保安林に指定されているので、それを開示する。あるいは移転先に文化財が埋まっているので、その調査に対する時間が遅れて、また1年短縮できる。それと土地造成の工事に約2年かかると言われておりますので、これも今から実施することによって、最長2年短縮できると考えております。それで最大で4年、今からやることによって短縮できらうと考えております。



これがですね、私たちが考えた土地利用計画の素案です(左図、上から1～3番め)。コンセプトは津波との向き合い方、つまり、この地域に住み続ける方法を住まい方から考えるということで、住民の方々に提案いたしました。中身を簡単にご説明いたしますと、津波浸水エリアにつきましては、ここは住んではいけないという非住家にするんじゃなくて避難対策をきちんとしておくゾーン、あるいは職住分離ゾーンとして「住んでもいいですよ」という所にしたいと考えました。少しなんですけど地域の中で高い所がありますので、そこはさらにかさ上げを行って、住めるようにするゾーンといたしました。さらに、こちら高台は高台移転ゾーンといたしました。それと単に山を削ってですね、高台に移転しようと言うだけじゃなくて、海の防波堤とそれと道路がここにありますが道路をかさ上げしたり、それとJRの盛り土がありますので、そこをもう少し強固にしまして、陸の防波堤計画で多重防御をして、その奥にさらに住めるようにしてはどうかという案を少しお見せしました。

その結果ですね、どんな意見が返ってきたかと言いますと、住民の方の反応は「地域の全てが被災するというのは、まだ想像できない」とか「その時が来なければ分からない」、「震災で全てが壊れてしまうというのは困る」、「被災してしまえば次は100年、150年後なので今の場所に住んでいる方がいい」とかですね、それから一方で「被災したのち土地を提供してもいいですよ」という意見も出てきました。ただ、「町が高く買い取ってくれるんだろうなあ」とか言われたりしました。「そもそも由岐湾内地区で高台移転は現実的に無理なんじゃないか」という意見も出ました。なかなかやはりこういう意見を見て東日本大震災を教訓に土地利用を考えようとしても、なかなか現実味が感じられなく思考停止に陥ってしまうような感じがいたしました。

次に徳島大学さんが行いました住民意識調査についてご説明

いたします。この調査の目的は事前復興まちづくり計画の核となるものを住民の方から抽出し、さらに事前復興まちづくり計画に対する住民の意欲を聞き出そうといたしました。

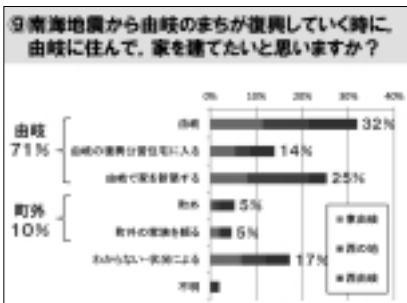
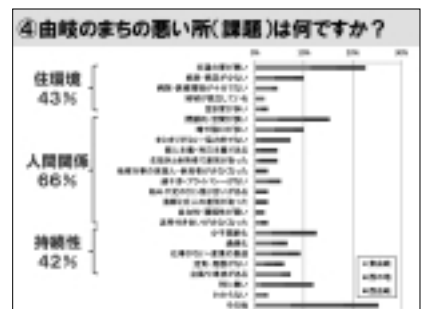
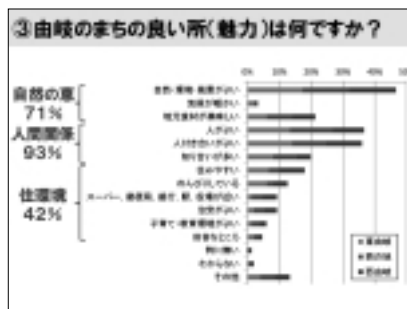
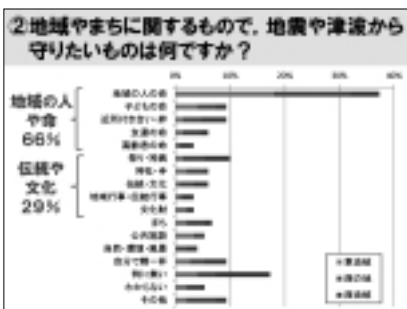
全て説明してしまうと長いので、いくつかポイントだけ引き抜いてきました。どんな質問内容だったかと言いますと、まず「地域や町に関するもので、地震や津波から守りたいものは何ですか？」という問いに対して、「地域の人や命」と答えた人が参加者の66%、続いて「伝統や文化」が29%でした。なので、こういうのが事前復興まちづくりの核になっていこうと考えました。

次に「町の良い所は、魅力は何ですか？」という問いに対して、「自然の恵み」が71%、「人間関係」が93%、これは複数回答となっております。それと「住環境」が42%という結果となりました。

逆に「町の悪い所は、課題は何ですか？」という問いに対して「住環境」43%、「人間関係」66%、というように良い所でもあり悪い所で住環境や人間関係というのが出まして、いわゆる本当に田舎の人と人の距離の近さというのが、こういう良くも悪くも評価されているというのが良く分かりました。それと「持続性」が42%ですね。この町が本当に続くのかどうかということ、少子高齢化とか過疎化とか、そういうことに対する課題を挙げておりました。

最後に「南海トラフ巨大地震から由岐の町が復興していく時に、由岐に住んで、家を建てたいと思いますか？」という質問に対して、71%の方が「由岐で復興したい」と回答いたしました。「町外」は10%でした。被災前ではあるんですが、東北の被災地の現状と比べますと現段階ではまだ高いと言えるかなと思います。

また、ちょっと変わったところで現在、集落の住民を対象に思い出の写真をデータ化し、CDに収録してお返しするプロジェクトを行っております。東日本大震災では大津波で大切な写真がたくさん流され、その後、ボランティアがそれらを集めて修復し持ち主に返したというのは、恐らく皆さんもメディアを通して見たり聞いたりされたと思います。その教訓を生かしまして、南海トラフ巨大地震に向けて震災前から大切な写真を守ろうということと取り組んでおります。お預かりした写真をCD 2枚に全部収録しまして、「1枚は普段DVDとかパソコンで見るように使ってください」と、「もう1枚は避難袋に入れて持って逃げてください」ということで、行っております。つまり、



大切な写真をデータ化して思い出を守る！
写真データ化プロジェクト

東日本大震災では、大津波で大切な写真が流失。設置ボランティアが集めて修復し、持ち主に返還。

南海トラフ巨大地震に向けて、**震災前から大切な写真を守ろう！**

写真をデータ化し、CDに収録
個人・家族の「思い出継承」⇒「地域継承」



守ると同時に迅速な避難に役立てていただこうと思ひまして、このプロジェクトを行っております。そして個人や家族の「思い出継承」からさらには「地域継承」につなげていきたいと現在とりくんでおります。ちなみにこれも徳島大学のインターンシップの学生さんがいつも手伝ってくれていまして、本当に助かっております。

最後に今後の展開についてご説明いたします。現在、徳島県では国に先駆けて津波災害警戒区域の設定、いわゆるイエローゾーンの設定を検討しております。しかし住民に対して何の説明もなくイエローゾーンを設定しては、単に不安だけをあおり、さらなる震災前過疎、あるいは避難放棄を助長してしまいます。つまり震災前から行政と住民とのボタンの掛け違いが起ってしまいます。ですから今こそ山・官・学・民が一緒になって地域、さらには徳島県の持続可能性の向上について協議すべきだろうと思ひますので、それについて働き掛けていきたいと現在考えております。

次に「先行高台移転の候補地の整備」を検討しております。先ほどご説明しました土地利用計画案の素案をお示した時に数名からですね、「うちの高台使ってくれてもいいよ」ということを言われました。そこで比較的小規模な造成工事で宅地を造り、地域に住み続けたいものを受け入れたいと考えております。そのアイデアとして公共工事に伴う残土の受け入れを行ったり、あるいは土地提供者・購入者に対する補助、補助ができないのであれば、例えば税の補助制度の創設ができないのだろうかと考えております。ただ、なかなか美波町の方も腰が重くて全く反応がないです。そして何より一番の課題がですね、すぐに使える土地が本当にありません。「ここ使っているですよ」と言われているんですが、私たち素人目から見ると田んぼなので、表土を除いて土を入れたらいいだけかなと思ってたんですが、専門家の方に見ていただくと、ここは谷内の場所なので、谷を埋めてしまうと非常に危険であるということをおっしゃられておりました。過去にも阪神淡路大震災などでも、谷を埋め盛り土というのは被災事例がたくさんありまして、ホームページにも載っているくらいでした。ですので、なかなか使える土地が無いというのが現在の悩みです。

続いて三つ目に「更なる連携の模索」を行っていきたくと思ひます。まず山間地域との連携を深めていきたくと思っております。その理由としましては、例えば沿岸部の津波に対しては沿岸部から山間部への避難、山間部から沿岸部への支援を期待しております。逆に山間部での土砂災害に対しては、山間部から沿岸部への避難、沿岸部から山間部への支援ということも考

今後の展開

事例の抽出【土地利用の適正化】

防災対策

先行高台移転候補地の整備

比較的の規模な造成工事等で宅地をつくり、地域に住み続けたい者を受け入れる。

【アイデア】

- ・公共工事に伴う残土の受入
- ・土地提供者・購入者に対する補助や税制優遇の創設

【課題】

- ・すぐに使える土地がない……

地盤が弱い農地の改良や山間部からの土砂災害対策も必要

更なる連携の模索

【山間地域との連携】

沿岸部の津波に対し、沿岸部から山間部への避難、山間部から沿岸部への支援

山間部の土砂災害に対し、山間部から沿岸部への避難、沿岸部から山間部への支援

【南海トラフ巨大地震「津波避難対策特別強化地域」止の連携】

被災対策の現状や課題、解決方法等の意見交換など

このシンポジウムを機会に、もっと連携を深めていきたいと思いますか？

今後の地域社会予想

	人	産業	経済	教育	文化	その他
過去 (1984年) (昭和59年)						
現在 (2014年)						
未来 (2044年) (昭和69年)						次の地域社会が 起こるから、地域は どうなるだろう……

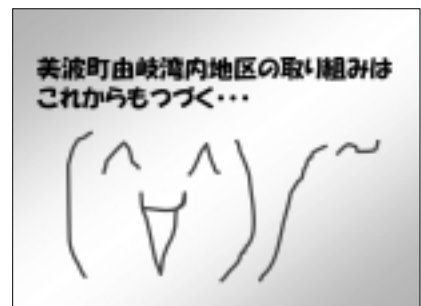
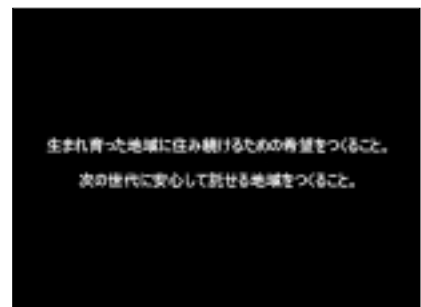
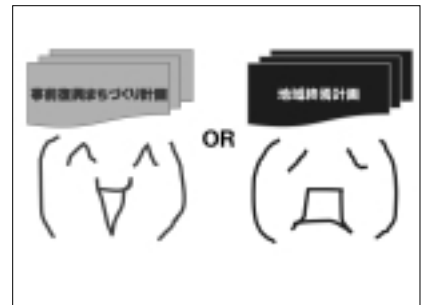
↓

地域力がますます低下

えております。それと「南海トラフ巨大地震の津波避難対策特別強化地域」というのが現在検討されておりますが、その地域との連携をもっともっと深めていきたいと考えております。そうすることによって、減災対策の現状や課題、解決方法等の意見交換などができるだろうと思っております。ぜひ、黒潮町の松本課長それから友永さん、このシンポジウムを機会にもっともっと連携していきませんか。本当に知恵を出し合う時が来ていると思います。

最後にまとめになっていきますが、今後の地域社会というのは、ますます低下していきます。その中で南海地震が起こったら地域はどうなるんだろうかと本当に心配です。恐らく復興できないかもしれません。私たちは事前復興計画、事前復興まちづくり計画を作るのか、それとも地域^{しゅうえん}終焉計画をつくるのか、本当は、後者は作らなければいけないのかもしれないですけど、私たちは諦めず事前復興まちづくり計画を作っていこうと思っております。

最後に私たちが活動している理念なんですが「生まれ育った地域に住み続けるための希望をつくること」そして「次の世代に安心して託せる地域をつくること」を目標に頑張っております。私たちのとりくみはこれからも続きます。どうも御静聴ありがとうございました。



徳島県美波町由岐湾内地区における事前復興まちづくりの現状と課題

美波町役場 由岐支所 地域復興室 浜 大吾郎

1. 美波町の概要

(1) 美波町の位置

徳島県の南東部、県都徳島市へは約50kmの距離にある

(2) NHK朝の連続テレビ小説「ウェルかめ」

美波町を舞台に、2009年9月から2010年3月まで放映

(3) 人口推移

7,765人（平成22年度国勢調査）・・・30年間で約34.6%減少

高齢化率 41.1%・・・今後さらに過疎化・少子高齢化が進むと予測

(4) 過去の南海地震で破壊と再生とを繰り返してきた町

①康暦の碑

1361年正平の大地震による犠牲者の供養費と伝えられている

現存する日本最古の津波碑

②昭和南海地震

地震発生約12分後に津波が町を襲った。死者9人、流失家屋43戸

2. 南海トラフの巨大地震による津波高・浸水域等及び被害想定（2012.10.31 徳島県津波浸水

想定、2013.7.31 第1次徳島県南海トラフ巨大地震被害想定より抜粋）

(1) 最大震度 震度7

(2) 津波予測（由岐漁港口）

津波影響開始時間 12分（+20cm）

最大津波高 12.3m

由岐漁港内の浸水深 10～15m

(3) 建物被害予測（美波町全体）

全壊棟数 3,300棟（全体の約81%）

(4) 人的被害予測（美波町全体）

死者数 2,400人（全体の約31%）

負傷者数 580人（うち重傷者数 250人）

住民は当初、被害想定に敏感に反応していたが、今は「いい加減にしてくれ」という感じ

3. 東日本大震災以前の取り組み

防災活動を地域づくりのシーズと捉え、楽しみながら実施してきた。

(1) ぼうさいAMOUR

防災訓練 + 婚活 → 若年層の防災意識の向上 + 少子化ストップ

(2) パンプーシェルターの製作

地域の剰余資源 + 災害時要援護者対策 → 緊急仮設住宅

4. 東日本大震災以降の課題

(1) 震災前過疎

震災を恐れて震災発生前に集落を離れる現象のこと（就職や結婚等を機に集落を離れる場合が多い）

→ 地域：コミュニティーの崩壊

→ 市町村：財政基盤の崩壊

(2) 災害に対する諦め感の蔓延（特に高齢者）

新想定に対する偏った理解「美波町＝津波高2.4m（内閣府公表の数値）」

どんなに頑張っても避難できない「みんなで一緒に仲良く死のう…」

年金生活の中で、防災対策よりも今日明日の健康に不安感

5. 事前復興まちづくり計画の策定に向けて

(1) 事前復興まちづくり計画

災害で被災することを前提として地域づくりを考え、地域の持続可能性を高める計画のこと（地域のランドデザイン）

地域の理念、方針を明確にした上で、防災対策だけでなく、土地利用計画、産業活性化策、福祉対策等を考えることが重要

(2) 現在までの取り組み

- ・徳島大学地域づくりセンター（サテライトオフィス）の誘致
- ・事前復興まちづくり計画の必要性に関する学習
- ・被災から復旧・復興までを考える学習（南三陸町馬場中山地区における復旧・復興の記録番組を鑑賞）
- ・ぼうさい夢リストづくり
- ・東日本大震災から1年の教訓（岩手県宮古市田老町から講師を招聘）
- ・老朽倒壊危険家屋を利用した応急危険度判定訓練
- ・土地利用計画案を考えるWS
- ・地域に対する住民意識調査（徳島大学上月研究室が実施）

6. 今後の展開

(1) 行政とのボタンの掛け違えの回避

今年度中に「徳島県南海トラフ巨大地震等に係る震災に強い社会づくり条例」に基づき、津波災害警戒区域（イエローゾーン）が公表される予定

→ 県からの住民説明会ナシ、災害から生き延びて地域で暮らし続ける方策ナシ

→ 住民の避難に対する諦め、地域永住に対する諦め、震災前過疎がさらに進行

「全国初」は重要かも知れないが、住民の意見を丁寧に聞く努力を怠れば、震災前からボタンの掛け違えが起きてしまう…

(2) 先行高台移転候補地の整備

比較的小規模な工事で造成可能な土地を宅地化し、地域に住み続けたい人を受入れる

（idea）公共工事残土の受け入れ、土地提供者・購入者に対する補助や税控除

（課題）すぐに使える土地がない…

(3) ソフト対策とハード対策のバランス維持

計画や訓練中心では、住民のモチベーションの保持不可能

津波避難から復興までを見据えた効果的なハード対策を行政と協働で推進したい

(4) さらなる連携の模索

・山間地域との連携

沿岸部の津波：沿岸部から山間部への疎開、山間部から沿岸部への支援

山間部の土砂災害：山間部から沿岸部への疎開、沿岸部から山間部への支援

・南海トラフ巨大地震「津波避難対策特別強化地域」との連携

対策の現状や課題、解決方法等の意見交換、情報共有etc.

(司会)

はい、浜さんどうもありがとうございました。美波町の状況を、ユーモアを交えながらお話をいただきました。事前復興まちづくり計画の必要性については震災前過疎をどう防ぐのかといったご報告をいただきました。それではここで報告1から報告3について一括して質問の方をお受けしたいと思います。質問のある方は挙手のうえお名前を言っていただいてから、どなたに対してのご質問なのか合わせてお願いしたいと思います。それではご質問のある方いらっしゃいますでしょうか。

(会場より質問)

報告2の及川さんにお聞きしたいんですけど、危険区域に平地が指定されているって言われてましたけど、あの危険区域というのは期間を設けて設定されているものでしょうか？ それともずっとこの先、危険なので家は建てられないというふうな設定になっているのでしょうか？



(及川氏)

災害危険区域は基本的にその条例の中で、期間を決めて設定しているということはありません。恐らく過去の震災の明治三陸・昭和三陸地震が、津波があって少したつと元の居た所にまた戻って来るといったことに対する町の反省もありますので、恐らくその災害危険区域というのは、これからずっと続いていくものだと思います。中にはその条例の結構前にですね、自分の土地に建てられた方もいないわけではないんですが、数軒志津川の町の中にはいます。災害危険区域はその23年の9月、10月あたりに作りましたので、例えばその作業の中でも住民の方に意見を聞いたり津波のきわのところですね、ここは災害危険区域にしたいんだけどもという、そういう相談を投げかけている所もありますし、もちろん、本当にもうすっかり津波でやられた所は、かなり本当に細かい仕事が多すぎたりしているところです。



(会場)

分かりました、ありがとうございます。

(司会)

他にご質問ございますでしょうか。
どうぞ。

(会場より質問)

岡林と言いますが、三浦さんにお尋ねいたします。映像を見た最初の時のコメントでですね、自分は作業の時に2階にいたと。逃げるという気がその時はしなかったというか、また分からなかつ

たという、ただ1階の職員や住民の人たちは逃げていたと思ったから自分も1階に居ればですね、逃げたかもしれないと、こういうようなことを言われました。私は、だからそう言うと周囲の者が逃げておれば自分も逃げると。だから今、「てんでんこ」ではありませんけれども、何をおいてもお互い声を掛けてまず逃げると、津波のしうちから。そういうことが通り相場になっておりますけれども、役場の職員でさえですね、あまりの揺れのひどさで「津波が来るよ」とこの揺れでは、「みんな声かけて逃げろ」という意識が訓練の中ではですね、これらの中でできていなかったなという印象を受けたのと、それと1階の人たちは「逃げ場がある」と思っていたけど、その1階の方は津波のスピードからいってですね、逃げおおせれたかどうかということ。それとライフジャケットをぜひ用意すべきだと提案をして職場なりあるいは自分の車で積んでいるということも思ったんですけども、俗に言ういろんな障害物が流れておるので、やっぱりそれでもライフジャケットは付けていると浮かぶというか、そういうことで思われたかどうかですね、その2点です。



(三浦氏)

うちの方では日中、勤務中の避難訓練をしていませんでした。それは反省点です。あの時にもし以前から……。津波の対策はしていたつもりなんですけども、家に居てみて、その津波の浜に、例えば「その町が、その浜の地域がどうなっているか」とか、確認の避難訓練はしているんですけども、ちょうど日中の防災、その避難の練習をしていなかったというのがあります。そしてみんなが1階に居ると自分だけ行きづらい、1回集まってしまうと逃げづらいというのがある気がします。「津波てんでんこ」はそのとおりだと思います。もし自分があのタイミングで、まあこう見て目の前の志津川流域に「今だったら逃げれるな」と思ったんです。でも、自分一人だけ逃げるということはできませんでした。

それからライフジャケットについては、まず流されているどうしであれば、もう「そんなにぶつからないかな」と思うんですけど、あと地面にぶつかるか、ビルにぶつかるかって感じかなと思うんです。たまたま、私の場合は最初の低い波で川が全部ぶっ壊されていってるので、私が流されたのは、ほぼ最後の波の高いところですから、最終的にはぶつかる物は何にもなかったという状況だったんで、私的に思うのは、例えば低い所でもし流されても、浮くことができれば地面にぶつかる確率も低くなるのかなと、ぶつかる可能性もと思って、とにかく、もし実際に逃げるような時でもライフジャケットを持たなくてもすぐ逃げては欲しいんですけど、万が一逃げ遅れるタイミングがあるとか、いろんな事情があるかもしれないので、そんな時に少しでも生存確率を高めていただきたいなと思いました。



(司会)

他にご質問ございますでしょうか。

よろしいですか。無いようでしたら、ここでパネルディスカッションの準備のために休憩を取りたいと思います。3時35分から再開したいと思います。よろしくお願いいたします。

(休憩)

(司会)

時間となりましたので、再開したいと思います。これからはパネルディスカッションに移りたいと思います。今回のシンポジウムのテーマでもあります事前復興について、高知県内の事例なども交えながら共に考えてみたいと思います。それではパネラーの皆さんとコーディネーターの方を紹介させていただきます。

パネラーは先ほど、ご報告をいただきました三浦勝美さん、及川貢さん、浜大吾郎さん、そしてここからは高知新聞社会部の大山泰志さんにも参加をしていただきます。大山さんは高知新聞の『高台移転、高知の沿岸集落は』という記事も書かれておられて、高知県内の沿岸集落の取材を多くされております。そしてコーディネーターを務めていただきますのは、黒潮町役場情報防災課長の松本敏郎さんです。松本さんは昨年第2回のシンポジウムでも黒潮町の取り組み、事例などの報告をしていただいております。

それではこれからの進行は松本さんにお譲りしたいと思います。松本さん、よろしくお願いいたします。

「事前復興を考える」

コーディネーター 松本敏郎氏（黒潮町役場）

パネラー 三浦勝美氏（宮城県南三陸町役場）
及川貢氏（ ” ）
浜大吾郎氏（徳島県美波町役場）
大山泰志氏（高知新聞社社会部）

（松本氏）

では、ここから私の方がコーディネーターということで、進行の方を務めさせていただきたいと思います。今日、このメンバーを迎えて、非常に大それた役なのかもしれませんが、精一杯務めさせていただきたいと思います。最初は3分くらいということで時間を頂きまして、自己紹介からということでございますので、少し私の方を皮切りに自己紹介をさせていただきたいと思います。

先ほどご紹介いただきましたように、町の情報防災課の課長を現在しております松本と申します。私が防災担当、非常にベテランとかそういうことではなくて、まだ防災の担当を受けて2年になっていません。3月いっぱいやって2年になるような状況でございます。あとちょうど2011年3月11日の時にはですね、総務課の情報推進係というところで町中に光ケーブルを張り巡らすような仕事とか、そんなような町全体の総合振興計画を作ったりするような仕事をしておりました。その後のちょうど昼前ですね、東日本のあのような大震災があった後、内閣府の中央防災会議が2012年の3月31日でございます。これまでの想定外が許されないというのが、ここで現在の科学的知見をもって最大級の地震想定、南海トラフにおける地震想定でございますけれど、それを出した2012年3月31日の次の日から情報防災課の課長となりました。

その後、町長に、当時34.4メートルという津波が来るかもしれないという情報。それから最大震

度は7であると。高知県では最短2分で来るかもしれない。三つの情報をまず知らされた訳でございますけれど。町長に私は「さて、何からやりましょうかね」というようなことを、告げてきたのでございます。その前は町長の方も、この情報では防災対策は取れないので、防災思想を作ってほしいという指示も、まず最初にいただきましたね。

それで、「東日本にまず行って



こなければ話にならないでしょう」ということで行きました。1週間ほど時間を頂いて行ってきたんですけれど、仙台空港に降りて、そしてその日は浜を歩いて、それからずっと東の方に上って行くわけでございますけれど、東まず志摩市の野蒜^{のびる}の駅の状況をちょっと聞きまして、突然、入野の松原とそこが重なってしまって、これはこの私が今から担当する仕事をするのは、心して掛からなければらいことになるというふうに体中でめっちゃ震えたような状況を今でも覚えております。まだまだ様々な課題を持ってやっと2年目になるわけでございますけれども、今日のシンポジウム、いろんな本当に衝撃的な現場での体験談、本当にこれからの私たちの対策にとって大事なことは、今日はたくさん聞けると思っております。進行を任されておりますので、どうかよろしく申し上げます。

では、次に私の隣の三浦さん、先ほどレポートいただきましたので自己紹介するまでもないようですけれど、簡潔にお願いしたいと思います。

(三浦氏)

今、当時から人事移動がありまして、現在は議会事業の仕事をしていただいております。議会の前に座った議員さん方と一緒に遠くの町に視察に行くこともありまして、すぐ防災対策の関係で震災後も、私、本年度は和歌山の串本町「一番早く津波がやって来る」と言われている町なんですけど、そこに訪問させていただきました。震災後にも議会事務局ごとに、いろんな町にというか、今迄ご支援いただいたいろんな地域の方に御礼も含めて、随分訪問させていただきました。初めてなんですけれども、いろいろ訪問させていただきました。



(及川氏)

及川です。私は合併前の旧歌津町役場という所に平成8年に入庁いたしまして、6年目にですね、町営住宅の方の整備、それから管理の担当の仕事を始めました。そこからずっと住宅行政に携わっております。震災後も町営住宅については、比較的小さい町の割には、400戸ほど管理していたんですけれども、その中で252戸が津波で流出しました。その町営住宅の管理をしながら、今度は仮設住宅の整備、そして仮設住宅が一段落した後、災害公営住宅の線ということで、そういった感じで仕事をしております。

震災前の町営住宅とかのその経験が、震災後に生きているのかと言うと、実際生かされているのが1割か2割くらいであって、本当に震災の規模、それから業務量も相当なもんですし、いろんな模索をしながらですね、仕事を続けてきたところであります。



(浜氏)

美波町・地域振興室の浜です。私は10年余り防災担当でやってきたんですけれど、5年前に希望して水産振興担当に代えていただきました。なぜ水産振興かと言いますと、やはり私の町も海の町で

すので、生業、それから地域の持続性を考えると、やはり水産振興を1度経験したいと思ひまして、頼んで代えていただきました。現在水産の中で何をやっているかと言うと、大きなお金は儲からないんですけど、ヒジキの養殖試験を現在地元の大学と連携して行っております。ようやく商業ベースにも乗りつつありまして、少しなんですけど水産振興の方でも結果がようやく見えてきたところなんです。あと我が家の業務としましては、掃除係と、それと洗濯係と、布団干し係と行っています。気を使って笑う所ですけど、多分このメンバーの中で、大喜利で言えば恐らく私は木久蔵きくそうかなと思いますので5時まで頑張ります。お願いします。



(大山氏)

高知新聞の社会部で防災の担当をしています大山と言います。もともと会社に入って今12年目なんですけど、防災の担当始めて4年半くらいになります。その前も須崎の支局に居て、その頃防災の取材をしていたので、防災に関わり出してからで言うと5年、6年くらいになるのかなと思います。ちょっと手短かに紙面、うちの高知新聞の紙面だったり、取材内容についてちょっと紹介させてもらいたいと思います。

東日本大震災後の土地の県内全般的な南海トラフ地震に対する防災意識というのは格段に高まってきたんですけど、うちの新聞でもそれ以前から地震の防災についての紙面作りというのには取り組んできました。今から10年少し前、2003年の4月から高知地震新聞という1ページの特集面を企画して防災に役立つ情報を少しでも、とっつきやすくというのか、分かりやすく伝えるようにということで紙面作りをしています。掲載日とかも毎回ちょっと少しずつ変わってきてるんですけど、今は昭和南海地震が、昭和の21年12月21日に起きたということに合わせて、毎月21日にその紙面作りをしています。

ここでお話するのにちょっと第1回目の紙面とかを振り返って見てみたんですけど、その頃、阪神大震災があって防災意識というのは徐々に高まって、南海地震も確率が高まってきて、そろそろ地震に備えようという気運が盛り上がってきた頃ではあったんですけど、その第1号の見出しとかを見ると、「小さかった昭和南海、次はでかいと認識しよう」というような見出しが付いていて、今であれば改めて説明することもないようなことなんですけど、今と見比べると、「やっぱり読者の方の意識だったり、知識だったりというのが大きく違うんだなあ」というふうに再確認したことでした。

東日本大震災についての取材なんですけど、うちの新聞でも東北は少し離れているので、なかなか足を運べなかったんですけど、3月下旬から4月に掛けて、僕自身も2回に分けて宮城県から岩手県まで取材に伺って三浦さんと及川さんがいらしゃった南三陸の方にも2回ほど足を運ばせていただきました。取材に行くことで被災者の方にご迷惑を掛けた部分もあったかとは思いますが、どうしても次のその南海地震が、やはり高知県の新聞として、被災地を見なければ伝わらないことというのは、多々あるだろうと思って取材に伺



わせていただきました。距離的に離れていることもあって、高知県の方にとって少し遠いというイメージは少なからずあると思うんですが、少しでも接点を見いだせるような原稿を出そうというふうに心掛けてはいます。国のシュミレーションだったり、浸水予測も含めてたびたび新しいものが出てますし、それだけでなく、増加されてくる情報だけでなく、やっぱり皆さんがとりくまれている各地の市町村だったり、一緒になってとりくまれることも含めて、その後、黒潮町の高台移転のとりくみとかもそうなんです、他の市町村が参考になるようなことに、つながればなという思いで取り上げています。今日はよろしくお願いします。

(松本氏)

はい、ありがとうございました。さてこれから5時までの時間いただいて、パネルディスカッションを進めていきます。構成についてはですけど、これからですね、私が皆さんにお勧めするお話の流れはですね、まず事前復興のことについて「事前復興をどう考えるか、それから何ができるか」というようなことについてお話をいただきたいと思っております。

続いてその次にはもう少し具体的なところに踏み込んで高台移転に絞って、それぞれ皆さんのご意見をいただき、そして最後に総合的なまとめをいただくような流れにしていきたいと思っております。

それで私の方でまず事前復興について定義を、基調をまとめるというふうな宿題を頂いておりました、3日ぐらい前から眠れず考えておりましたけれど、非常に先ほど発表してくれた浜さんがですね、非常に分かりやすく事前復興の考え方について説明していただいたんじゃないかと思えます。最後の方にですね、生まれ育った地域に住み続けるための希望を作ることが、次の世代に安心して託せる地域を造ること。こういうために事前復興のとりくみが必要であるということがお話しされました。

正しく町の歴史を振り返ってみますと、1707年、今から307年前にこの町は大きな震災に襲われました。その時の歴史をひもといて読んでみますと、ことが起こった時から、復興までに100年たっています。100年と少し、こういう書が残っております。つまり3代、4代に渡ってその爪痕が残ったような状況です。やはりその間、非常に生活が厳しくて大変な状況であったと思いますね。

今そういう歴史を繰り返さない、そして東日本で今日どういうことが起こったか、具体的なお話もたくさんいただいております。それから現在、それに対してどういうふうな課題を持ってとりくんでいるか、時間が掛かる分たくさんお話していただきましたので、そういうことも踏まえてこの事前復興についてはですね、まず、やはり古里はそれぞれ海に近い所です。でも地域は海の恵みがあって、やっぱり希望を持って住み続けられる古里であり、住み続ける所ではあるわけで、そしてや



がてその日が来ます。その時が来たときにいかにうまくその場をしのいで、そしていかに平日、平常に戻すか、そういうようなことを備えるためにですね、「何が必要であって何ができるか」というようなことに、絞ってですね、それぞれの皆さんに意見をお伺いしたいと思います。

先ほど、三浦さんの方から「まずは死なないことが大切です」とか、それから生き残ってもですね、やはり家族を失うと希望

も失う人も多いという話もいただきました。さまざまな形のさまざまな立場のご意見が伺えると思いますので、最初は定義をうまく整理してくれた浜さんの方から、先ほどの話の整理になるかもしれませんが、「この事前復興ということはどう考えるのか、何ができるのか」、そのことについてまずはお願いしたいと思います。



(浜氏)

あの、すいません。トップバッターを私に振っていただいたんですけど、自分で事前復興まちづくりとかいろいろ言っている割に実は本当に迷っております。そもそも事前復興というのはですね、今は違いますけれど以前いらっしゃって、首都大学東京にいらっしゃった中林樹先生という方が、考えられた作られた言葉で、東京都の方ではもう既に事前復興計画というのは出来上がっております。私たちはこの事前復興計画という東京都が作った行政的な計画ではむしろ駄目、はっきり言って駄目じゃないかなと思っていて、住民の方々が主体となって、まちづくりということを加えた事前復興計画まちづくり計画でなければいけないのだろうと思っています。

東京都の何が駄目かと言いますと、やはり行政的な計画であったり、それからどう復興するかということしか述べられてないんですけど、被災してどう復興するかしか述べられてないんですけど、私たちはそれをもっと大きくまちづくりとして捉えて、この町をどう存続させるとか、未来へどのように次に継承していくのかということを考えて文章化していきたい、計画化していきたいと思っています。

そもそもまちづくり計画というのは、どこの市町村にもありますけど、見られたことが結構あるかとは思いますが、大体バラ色の未来のことばかり書いているんですよ。福祉のことについては本当に体制的に、本当に余裕もない割にいいことばかり書いて、「あんなことします、こんなことします」書いている割に具体的な案は書いてないんですよ。でも事前復興まちづくり計画では、もっともっと現実を見つめて、しかし本当は少子高齢化であったり、その先には大震災も待っているんだよと。その中で「もっと現実を見つめて町の将来を考えて行きませんか」というのが事前復興まちづくり計画なのかなと思っています。

私が迷っていると言ったのは、実はその事前復興まちづくり計画を作ったところでどういう位置付けができるのかというのが、まだ全く答えが見えてないんです。行政の方には先ほど言いましたまちづくり計画、総合計画、それから都市計画であったり、たくさんの計画がありますけど、じゃあ、「その事前復興まちづくり計画を作ったから、その地域どうなるんですか」と言われたら、正直何にもまだビジョンがないです。ただ住民主体できっと作らなければ、この先いけないんだろうなというのは思っております。まだそれくらいの答えしか持ってないです。すいません。

(松本氏)

ありがとうございます。事前復興まちづくり計画が、どのように役に立つのか迷っているというふうなお話でございますけれど、私の知っている範囲では少なくとも、役に立った例はあるんじゃないかと思ってますね。阪神淡路大震災が起こった時に、あれは震災の1週間後に基本方針を行政が決めて、約2カ月で計画を決定しております。そういうふうな行政指導が早いペースでやったもので、その後は大変だったそうですね。住民と行政の混乱が非常にあったそうです。それでそういう方法を取らなかった、いわゆる実際のまちづくりをやった例というのは、有名な話でございますけれど、何か神戸市の長田区と東灘区、真野地区と、深江地区ですけれど、この二つは事前にまちづくりを住民が「ああでもない、こうでもない」と時間を掛けて事前にやっておったそうです。そういうところがですね、非常にうまくいったという事例を報告しておりますので、やはり、そういうところにヒントがあるような気がします。

じゃあ、続いてそうですね、じゃあ、三浦さんお願いしたいと思います。



(三浦氏)

はい。事前復興の中で、この被害想定されることによる住民が減っていくという過疎の話の事前に聞かされておりました、それを食い止めるということに対する対策が実は全然思いつかなくて、この場で何も話ができないということを実は私、嫁の方に夕飯の際にですね、話をしたんですけど、その時に嫁が言いかけたのが「今はしょうがない」と。「今はしょうがない」、いずれ復興することができるんだと。そういう歴史を繰り返している。とにかく生き続けられることが大事だということで嫁にそれ言われて、10歳下の嫁に言われて、逆にちょっとホッとした部分はあるんです。南三陸町長もその人口減、いわゆる減っている状況を阻止する言葉が、コメントと謝罪も具体的には出てこない、という状況であると思います。

しかしながら、私は理想論かもしれませんが、黒潮町の皆さまのこれまでのとりくみだったり、そして今日までお近づきにさせてもらった皆さまのその人材の意気込みだったり、黒潮町の情報を最後にインターネットで検索しました。「恋するフォーチュンクッキー黒潮町バージョン」を発見しまして、あれを見て、何か「いいなあ」と思って、皆さんのチームワークというか、何か、あったか味を感じました。そして今日、訪問して町も本当にすばらしいロケーションでした。いざ何か起きたとき、町を離れないで愛して協力し合っていていただける町なのかなと実は感じました。

ただ、どうしてもいろいろ調べていく中で自然人口の減少もありますので、どうしてもそれには若い人が定住するという部分で、やっぱりそれが必要なのかなと思いました。うちの合併した、南三陸町として合併する前の志津川町と歌津町というのもありまして、我々は歌津町側の人間なんですけれど、その子どもたちのアンケート調査で、「やっぱり、町を離れたくない」というのが、歌津の地区の子どもたちが多くて、現在も人口としては歌津地区の減少率が低いということで、そういう意味では小さい町でなじみが深くて、やっぱり愛着がある。これからもその地元で暮らしてい

きたいという、町に震災が起きても、そういう状況にあるんです。

いずれ、どうしていいかわからない状況ではありますが、少なくとも、住民の皆さんと一緒に仲良くしていけたらいいなと思うんですけど、そんな感じで本当に黒潮町の皆さまの様子を拝見しておりました。

(松本氏)

はい、ありがとうございます。本当に先ほどの話を聞いても、三浦さんの凄まじい体験、それから圧倒されたと言いますか、ちょっとびびってしまったような感じでございます。現在のところなかなか事前復興ということが考えられる状況では、なくもないわけです。それもうまいことですね、及川さんの方から続いてお願いしたいと思います。

(及川氏)

私は正直、事前復興という言葉は今回初めて耳にしました。もちろん、南海トラフの新想定はどこかで目にはしていたんですけど…。それを受けて事前復興というそういう動きがあるということも今回初めて分かりました。仮に私たちの町で震災が無くてこういった、例えば黒潮町と同じような感じで、そういう想定がなされた場合、「じゃあ、事前復興というのができるのか」というと、行政の動きは別として多分その住民の方、「じゃあ、高台に」という議論はちょっと難しいのかなと思います。

漁業で成り立っている町でありますので、今回のこうした集団移転にしても、もう本当に自分たちが今、漁場というか、その目の前には自分たちの今迄漁をしていた所の海が見えるその高台に行きたいという思いが強くて、今回18団地という数の多い団地ということで、今計画をしているところです。私たちがちょっと考えを述べるというまではいかないんですけども、例えば震災後、例えば防災集団移転に関していろいろな問題が出てきました。例えば区割り、その集落の区割りとかでも、スタートラインに立って行政と住民の話し合いが始まってしばらくたった後に、一つの団地が二つに分かれるとか、そういったケースというのは二、三の集落で起こりました。そういうのが起こると、その計画自体も一からの計画ということになってしまいますので、それだけでも時間を要してしまうということになります。

先ほど、ちょっとお話をさせていただきましたけれども、福島県でこれがなかなか困難を極めておりました、まだ3年たってもなかなか再建方法を決められない住民の方おられます。こういったその、例えば先ほどの集落の区割りにしても、町が考えているものと住民が考えているそのものというのは、必ずしも一致しているわけではないというのが今回分かりましたし、そういったこともですね、もし事前に、まあなかなか難しいと思うんですけども、そういう情報を把握とかしていくことができれば、もしかしたら震災が来た後、あまり時間が掛からない中での高台移転ができるのかなと思っております。

それからあと、防災集団移転の制度についても当初は東日本大震災の特例というのは、震災後の数ヶ月間は国から特に発表とかはなくて、従来の防災集団移転の制度を適用しますという回答であったんですが各市町村、被災自治体の市町村から要望を挙げていって、例えば造成に掛かる町の持ち出し分は2分の1から8分の1へ減らされましたし、そういった数ヶ月間での動きがありました。

例えば、こちらの方で使える制度をもう一度見直すというか、じゃあ、こういうことができないのかと言ったところですね、国に要望していくというのも、確認をしていただいた方がいいのかなと思っております。

(松本氏)

はい、ありがとうございます。そうですね、防災集団移転促進って当初は従来の特例な事情で今通ったんですね、最初の方も。この防災集団移転促進事業、昭和47年にできている制度なんですけれど、事前の指示するのはですね、昭和47年から災害の前にこの事業をやった所は全国にないんですね、そういう意味で特例がないと非常にやっぱりいろいろ問題ですので、それを被災後にですね、使えというのは、なかなかそれは大変だったと思います。その特例で見て現在は防災集団移転促進事業を使った高台移転が順次進んでいるということですので、高台移転については次のテーマで少し踏み込んで、もう少しお話をお伺いできればと思います。では、先に大山記者お願いします。

(大山氏)

記事でもよく事前復興という言葉を使うんですけど、事前復興という言葉でも、すごく分かりやすいようで実は先ほど、「迷われてるとか」、「どうしよう」とおっしゃられてましたけれども、分かりにくい。「事前」と言う言葉も「復興」と言う言葉も分かるんですが、事前復興となった時になかなか分かりにくい言葉だなと思って、それこそ高台移転の連載をする時に、ちょっと防災とか復興の専門家の方に会う機会があったので「事前復興というのは、そもそもどんな意味ですか？」と素人ながら聞いてみたんですが、その方はそもそも復興というのが、「失ったものを取り戻す」とよく言われるけれどそうではなくて、復興というのは「衰えていたものが元気になることだ」とおっしゃられていました。衰えているものというのは何かとお聞きすると、それはコミュニティーであったり、地域社会であったりまあソフト的なものもそうだし、あとボロボロになった家を頑丈なものにするということも復興だと話されていました。

東北では今復興が進んでいますし、そのために高台移転というものにもとりくまれています、もちろん高台に復興ということになるんですけど、より安全な所に移るということを考えると東日本大震災からの復興であるというのはもう間違いないんで、それイコールその30年に一度来ると言われる次の三陸沖地震に対する防災にもつながることなんだろうなと思いますし、何かそんなに考えると結局その事前復興というのは、より安全な地域を造ることで、それで避難路を整備することも含むでしょうし、そのよりよいコミュニティーを作って助け合うことも含めて、その場所に住み続ける理由まで含めて考えることかなと思って、結局その事前復興といった難しい言葉ですけど、結局その防災だったり、まちづくりだったりということ、着々と進めるということに戻ってくるのかなあと思うようになりました。

県内をよくあっちこっち、もちろん取材に行くんですが、その中で高知市のはりまや橋の東側に二葉町という地区があって海拔0メートル地帯で、ご存じの方も多いと思うんですけど、昭和南海地震でもそうですし、次の南海トラフ地震でも長期浸水で水没するみたいな状態になると言われています。ここは昭和の地震でも水没した、長期浸水で水没したということもあって、もともと東

日本大震災前から防災に熱心な場所で、たびたび記事でも取り上げるんですが、その中の特に面白いと思ったというか、進んでいるとりくみだなあと考えたのが中山間部の仁淀川町という所と交流してるという、記事でも1回出しているんですけど。その話がすごく反響を呼び、面白かったので紹介したいなと思うんですが、今も言ったように昭和南海地震でもこの二葉町というのは、1カ月くらい長期浸水で暮らせなかったですし、もちろん高知市でも人口が多い割に浸水しない地域が少なく避難所がそこそこ確保できないという問題も抱えていて、その中で自分たちで事前に避難先、二葉町のまだ疎開先と言われてますけど、疎開先を確保しようというとりくみです。



疎開保険と言う枠組みを作りたいというふうにもおっしゃってましたけど、どういうものかと言うと、その二葉町の方から会費を集めて、そのお金を使って仁淀川町の方で農作物を普段から作って、その普段被災じゃない時というのは農産物を仁淀川町から二葉町の方に送りますし、もし被災して疎開した時には防災食というか非常食として使おうというとりくみです。仁淀川町側が被災時に二葉町の人たちが避難生活を送る場所というのを、例えば空き屋だったり確保しておこうというものなんですが、仁淀川町側にも防災・減災につながったり、交流人口の増加につながったりという、どちらにもメリットがあるとりくみで、それを事前からやっているということが事前の交流、事前復興なんですけれど事前からの交流を含めてやっているということがとても面白いなと思いますし、その事前復興というものにとりくむことで二つの地域がより良い方向に向いているんだらうなということで見ても興味深いとりくみだと思います。

先ほど神戸市の長田区のお話が出てましたけれど、長田でも再開発だったり都市区画整理事業だったり導入されてましたけど、やっぱり大規模な再開発があった所では町がせっかく綺麗な建物ができたけれど、逆にシャッター街になってしまったりというような問題があって、長田区でもその事前にまちづくりを考えてたことで進んだ面もありますし、それだけ考えててもやっぱり手間どった部分もあったと言われてましたし、やっぱりその、また少しでも事前に考えておくことで、やっぱりより良い方向へ向いて行くんだらうなと思います。綺麗ごとになってしまうんですけど、結局事前復興というのはハード面だけでなく、地域で被災することを事前に考えておくことこそが事前復興なんだらうなと再確認したことでした。

(松本氏)

はい、ありがとうございます。具体的なソフトに近い実践取材の例を挙げていただいたと思います。今日の事前復興について今日の会合を企画した1人の友永さんから、事前復興については事前防災の内の生活に密着した古いまちづくりである暮らし・職業・住まいの分野にあった全ての活動について、考えていくことが良いんじゃないかというお話を伺っております。

次は、そのさまざまな事前復興のとりくみの中でも、最もハード的なことになるかもしれませんが、現実的な生活の基盤というか、究極と言ってもいいぐらいの防災の対策について、そこにちょっと焦点を絞って、皆さんからご意見を頂戴したいと思います。黒潮町のそういうとりくみを黒潮町内の出口(いでぐち)という地域で現在勉強会というのを10月から開催しております。本日のこの会

場にも出口地区からですね、何名かご参加いただいておりますけれど、あくまでもまだ勉強会のレベルということで、さまざまな課題が住民側と、それから町の方にまだある状況でございます。

これからこの高台移転、事前復興一つの方法ですね、その高台移転について被災地のとりくみも事例を含めてご意見をお伺いしたいと思います。最初はじゃあ、及川さんの方からお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

(及川氏)

先ほど、ちょっとお話いたしましたけれども、高台移転が町内で28地区整備をしております。問題点として先ほど述べたこと以外で、事業を進めていくにつれて、例えば志津川中央地区という所では途中で遺跡が出てきまして、その発掘調査で1年半くらい時間を要しました。最終的にはそこで高台移転を進めていくことになると思いますけれども、計画を立てて実行していくその最中でもさまざまな問題が出てくることは、ちょっと頭の中に入れていただきたいと思います。遺跡じゃなくても、まあこれはあまり大きな声では言えませんが、例えば不法投棄だとかそういった20年前、30年前くらいに、そこに埋めてあったゴミとかが出てきて、それでもまた半年とか、そういう時間を要した経緯があります。

そういった障がいというのは、町はいろんな関係機関と調整して協議して進めていくわけですが、その中でも並行して住民との話し合いをしていく。あるいはこれが駄目だといった議論がずっと毎週、毎週のように、続いていくわけです。住民の要望はできるだけ町の計画に反映をさせたいと考えて計画を作るんです。そのとおり住民の要望全部を聞けばいいんでしょうけど、なかなかそうもいかない。落とし所を見つけて最後に計画を練るんですけれども、例えば復興庁のヒアリングの時には「これはいりませんよね」と、そういった話も出てきて、1歩進んで2歩下がったりする時もありますし、そういった時間というのが、最初に計画していた時間よりも多く掛かるということは被災地では当たり前という感じです。

ただ、やっぱり先ほどの町営の仮設住宅に住んでいる方にとっては、「早くその団地ができれば戻りたい」、でも3年、4年掛かるのであればちょっとそれは「こっちに居た方がいいんじゃないのか」という声も聞かれます。担当レベルで被災者の方とお話しますと、それは本当に皆さん切実なので、町に帰ってきていただきたいんですが、「帰ってきてください」とはなかなか言えない、そういった実情もあります。ただ、本当に1日でも早く、そういう高台移転、災害公営住宅をできれば完成させて1人でも多くの方に帰ってきてもらいたいと、今そう思いながら事業を進めているところです。

(松本氏)

はい、ありがとうございます。先ほどの話で、ちょうど財政規模が、15倍くらいに上がったというのは非常に驚いたんですけど、これは予算が多くなれば町は助かるなんてことは大間違いで、マンパワーがとても不足になるのであって、大変なことなんですね。そんな訳で、災害公営住宅もそれから高台移転も大変な作業であると思います。

じゃあ、次に三浦さんの方からお願いしたいと思います。

(三浦氏)

今うちの町で、高台移転でその問題点が、造成の完成を待つられないという方々、お年寄りの方々とか、例えばうちの嫁のちかくの僕のおふくろと、嫁のおふくろとおばあちゃんの2人なんですけど、どうしても地域の志津地区という地域で本当は高台移転に申し込んではあるものの、早く家を建てて仮設住宅を離れて家で過ごしたい。地域で、みんなで、とにかく家で人生を全うしたいという意見で、もう土地を借りて家を建てる申し込みを始めております。そういう方々が現在も出ております。我々の問題としてやはり時間が掛かるといふことで、例えば歌津は南三陸町の震災のことを考えて高台移転ということ初めは考えていたんです。もっと早くにこの地域はこの場所、この地域はこの場所とか住民での話し合いをもし進めていたならば、「もっと早い着手ができたのかな」と思いますし、及川の話では文化財の遺跡が発見されることも早めに調査してあれば、もっと早い造成が、着手ができたのかなと思います。



もしも高台移転を進めていたならば、早い地域設定とかもし可能であれば、そうしてもらったらどうなのかな、と。町の中でどうしても被災地域は高台移転ということまで想定していない。本当は想定するべきだったんでしょうけど、それをしてなかったと、時間が掛かる。よそよりも時間が掛かることによって住民が離れて行ってしまふ.....そういう問題が起きている。またお金を借りれない状況という方もいらっしゃいますし、収入の面で問題が発生してる。その状況を、もし事前に計画を持っていれば、計画ができたかもしれないし、そういうやっぱり事前の準備が我が町も必要だったかなと思います。できるのであれば、そういう計画をこれから作っていただけたらどうなのかなと思いました。

(松本氏)

はい、ありがとうございます。被災された地域の方の生の声として、やはり高台移転のようなものが必要であるというご意見だったと思います。黒潮町も含めてこの高知県の議論のなかで、高台移転そのものが良いのか、悪いのかで議論もございます。それらの問題というのは恐らく地域の方に金銭の問題とか、財政の問題があると思いますけれど、何よりも自らの地域、そして自らの体験としてのご意見は、非常に重いものではないかと思っております。次は浜さん、お願いします。

(浜氏)

恐らく松本さんもそうでしょうし、こちらのご参加の方々もそうだと思うんですけど、高台移転が全てOKというわけじゃないと思っているはずだと思います。私も実はそれで、ただ選べる方がいいですよ。何かのコマーシャルで見たかもしれないですけど、選べた方がいいと思うんです。高い所に行きたい人は高い所に、低い所に住んで自分の命を守れるという保証があるのであれば今の所に住める方がいいのかなと思っています。

ただ一方で私たちも高台移転のできる候補地を模索しておりまして、探しているんですけど、なかなかありません。先ほどお示したような土地利用計画案をお示してもなかなか現実味がない。

土地計画の専門家の方にあれをお見せすると、「じゃあ、あなたたちどんな町を描いてるの？」と言われます。とにかくみんなてんでんばらばらにコミュニティーを挙げてしまうと、いける人から挙げてしまう。「じゃあ、コミュニティーの機能とか、それから利便性とか、景観形成とか、どういうふうに考えてるんですか？」と言われまして、実は何にも考えてないんです。ただ単に選べる方が良いというくらいしか考えてなかったですけど、でも本当に次の世代にきちっと残していくのであれば、まずしっかりとその議論をして、どういう町を描きたいのかというのは、今私たちの世代がしなければいけないだろうなと思っております。でもその中で低い所にも住むのもあり、高い所に住むのもあり、というのは選べた方がいい。取りとめもない答えになりますが…。

また余談なんですけど、ある都会からの専門家が来た時に言われたんですけど、「あなたたちの小さな集落だったら、都会のマンション1戸建てると十分賄えますよ」と言われました。めちゃくちゃ腹が立ちましたね。あのやっぱり私たちはこの地域の、何て言うんでしょうね……本当にDNAでずっと植えつけられたようなものがあるんだと思うんです。その中でこの地域が好きなんでしょうね。なので本当に全くきちんとした理由も無くこの地域が好きでこの地域を残したい、そして次の世代に託したいという思いが強いだけで、だから生き残るためにどんとモーション掛けてハイ終わりというのは絶対にしたくないなと思います。

(松本氏)

はい、ありがとうございました。やっぱり選択できる方がいいと、これは取りあえず正直なご意見ではないかと思えます。黒潮町のことは、私は大概わかるんですけど、県下的に見てそれぞれの信頼関係を無くすると、どのように思うことについて考えてるのか。これは大山記者が非常に詳しく取材されておると思いますので、続いて大山記者の方からお願いしたいと思えます。

(大山氏)

南海トラフ地震の特措法(特別措置法)が成立したこともあって、やっぱりその事前の高台移転というのが話題になる機会というのは増えていると思うんですが、やっぱりその、どうしてもハードルというのは高いと言わざるをえないだろうなと思います。去年の9月に県内の沿岸の19市町村に高台移転についてどう思うかというアンケートを行ったんですが、具体的にその自治体として検討していると答えられた自治体の選択肢の出し方もあるのであれですけど。検討していると答えられた自治体というのは、香南市とこの黒潮町の二つだけでした。

その一方でその事前の高台移転というものが有効かとお聞きすると、全市町村がやっぱり有効だとお答えになってました。ただ、19の内の16市町村というのは、先ほどから話が出ている住民合意だったり、あと財政負担の大きさとか、高知ってどうしても平地が少ないので移転する土地がないとか、どうせ南三陸も28カ所とおっしゃられてましたけれど、そもそも検討する対象地域が多すぎるので難しいという、そんな理由でやっぱりこう16市町村は現実的でないと話題になっていました。

今、黒潮町の出口地区でも勉強会というのが行われてますけれど、実際その住民の方を含めた勉強会が行われている地区というのは、現在では出口地区と、あと隣の四万十市の水戸地区という所の2カ所だけですし、四万十市の水戸地区という所でも行政側がやっぱり財政負担が大きくて難し

いと勉強会の中でもお答えになってましたし、現時点ではやっぱり難しいと言わざるをえないという思いをお持ちのようです。

もちろん、選択肢が多い方がいいに決まっていますし、やればいいのかと僕も思います。ただその一方で本当にやっていいのかという思いもあるんですが、今話しました行政の方たちのご意見というのが、行政の方々も思っているんだということだったんですが、去年高台移転の連載をする中で住民の方、実際高台移転を検討されている、されてないというのは別として、住民の方にも多くお話を伺ったんですが、やっぱり住民の方の声として、「今一緒に住んでいる人たちと、これからもずっと暮らしたいんだ」という声だったり、どうしても高台移転って個人の負担も増えてきますし、それが事前になればなおさらのことで、「どうしても一緒に暮らしたいな」という思いもあるとおっしゃられてましたし、あと、そもそも高台移転の話が出て地域で検討する中で地域自体が分断されてしまうんじゃないかという危惧をお持ちの方もいらっしゃいました。

あと先ほど浜さんがDNAとおっしゃってましたけど、50歳とか高齢になるまでその地区に暮らしてきたので、今更その別の場所に行く安全だと言っても移ろうとは思わないという方もいらっしゃいましたし、そもそも漁業をしているので、ここからは離れることができないんだと、声かけられる方もおられます。本当に10人に聞くと10通り、賛成・反対に大きく分けると、分けられるのかもしれないですけど、その中でもいろんな条件があって10人居れば10通りの考えがあるんだなと思いました。

高台移転ってその全員合意が原則ですけど、移れる方から移ればいいんじゃないか、特に避難できない方はどうしても移らざるをえないんじゃないかと議論もあるかと思うんですが、その地域で高台移転を考える場合、どうしても住みなれた集落というその前に、やっぱりこう今よりも不便な場所に行かざるをえないだろうなと思います。その仕事・家庭の話なんですけれど、例えば移りたい人は移りました、ただどうしてもその集落という、移った先の集落というのは不便な集落ですし、今移る方は若い方たちが今移ったとしても、例えば何十年か無事に津波が来なくてその方たちが高齢化した時に、じゃあ、その子どもたちはそこに多分思い入れもない、「まあ自分はそうだった」という思いはあるかもしれませんが、地域の歴史もないコミュニティそれほど無い中で、「じゃあ、そこに本当に住み続けるのかな？」という気もします。

この残った集落が高齢化したというか、そこに住みました。長い時間、何十年かたった後にその移った先の新しい集落というのも実はこれがまた過疎化が進んでしまいましたとなると、結局、良かれと思って事前に移った安全性は高まったのかもしれないですけど、結局何かこう地域が分かれて二つになってしまったことで、どちらも限界集落と言うのか、高台移転によってこう、過疎化というのはどこでもある問題だと思うので、高台にしたからどうっていうのとは言い切れないとは思っています。結局その事前の高台移転をすることで地域にとどめを刺してしまうみたいな形になったら、ちょっと悲しいなと思いますし、まあ答えは無いんだろうなと思うんですけど、その事前の高台移転というのは、そのもろ刃の剣じゃないですけど、メリットもデメリットもあるんだろうなということも認識した上で、安全性だけ高めて我慢して移るというだけではなかなか地域に根ざして生活を送るということにもならないでしょうし、本当に理想論で申し訳ないかと思うんですけど、移った先の地域をどうやってより良くしていくんだというところまで本当は含めて、事前に移るということはそれだけ時間もあるのかなとも思いますし、そこまで考えて事前の高台移転ということ

の方向にとりくんでいければ良いのかなと思いました。

(松本氏)

はい、ありがとうございます。高知新聞の論客もですね、高台移転の問題については、まだまだ悩ましい状況、今のお話から随分伺えたんじゃないかと思います。これから彼が書く新聞記事がどういうふうになってくるかぜひ注目して見ようと思います。どうもありがとうございました。

じゃあ、最後ですね、まとめの方に入らせていただきたいと思います。また大規模災害が発生した際のことを想定して悲惨な状況をいかに最小にするか、そしてコミュニティーにおけるしたたかで、しなやかで、賢いとりくみ。転ばぬ先の杖と申しますか、スマート・レジデンス・ビジョンと申しますか、それらのことについてそれぞれの方に、今から最後のまとめをいただきたいと思います。

まず三浦さんの方からお願いします。

(三浦氏)

先ほどの、私この話でちょっと言えない部分もあったんですが、まとめということで、それともし有事の際に皆さまに早いスタートを切ってもらうために、避難する際の準備物なんですけど、何でもかんでも本当は持って逃げればいいんですけど、皆さまには特に男性の方は、ぜひ免許証と貯金のカードですね、それを持ってというか常に懐に入れていただきたいと思いました。

震災後に起きる現象として、2週間後くらいに今度はお金が、資金が必要になってくるんです。そして自分を証明するものがないと、銀行で言えば20万しか貸してくれないんです。名前を名乗っただけでは。そうすると今度は役場機能が機能しない。住民票も出せないそういう状況ではお金は必要で、例えば車を買いたくてもできなくなりますし、またはいずれ「生活再建支援金」という被害を受けた方はもらえるようになるんですけど、それは「口座を教えてください」となった時に教えられない状況になるんです。ですから男性の方、もしくは家族のせめてどなたか、お金も自由に下ろせる状況にいて、避難できて欲しいなと思っています。

それからあと、お年寄りの方なんですけど、これはぜひお願いしたいと思います。今飲んでいる薬が何なのかを分かる手だてを常にしていきたい。例えば、



実際その南三陸町から家族が、例えば二人、山形に移送するという状況になった時に、家族は、この方が何の薬を飲んでいて、どういう状況かも分からないと大変で治療のしようがないという状況になりますので、できれば飲んでる薬は、何々とそういうのをご本人に常に持っててもらったらどうかなというのが、一番の思いです。万が一、お金が全部流されてもしょうがないんですけど、お年寄りの方でお薬を常に飲んでいる方は、ぜひそ

れを準備していただきたいなど。

今お話しした二点あれば有事後のスタートが何とか切りやすいかなと思います。ちょっと、私がおまめにならないかもしれませんが、お願いしたいと思います。

(松本氏)

ありがとうございます。まずは死なないのが大切と言われる三浦さんらしいおまめではなかったかと思います。本当に自分たちにとってはですね、大切なご意見だと思います。では、続いて及川さんの方からお願いします。

(及川氏)

三浦が再三、命を守るというお話をしていますけれども、ちょっと最後に私も一つだけお話をさせていただきたいと思います。作家の吉村昭さんという方が『三陸海岸大津波』という本を出しておりまして、かなり昔に出版された本なんですけれども、私は10年くらい前にその本を始めて取って見て、この本はその吉村さんが三陸の海岸、岩手から宮城をずうっと歩いて、その村、その町の長老とかおじいさんだったり、おばあさんにそのお話を聞いて、さらには津波に遭った時の子どもたちの作文などを掲載しながら、「まあ、津波はこういうもんだ」ということを、その本で伝えているんです。

私は津波の時に、三浦と同じ役場の庁舎にいたんですけれども、多分揺れが収まって3分、5分くらいで、中学の避難誘導を兼ねて高台に上がったんです。それはこの吉村さんの『三陸海岸大津波』をこう何回も読み直し、例えば明治三陸の時は15メートルの津波が、それぞれ二つくらい来た。津波の映像というのは東日本大震災の前にはあまり無かったものですから、15メートルの津波がどういうもんなのかということ、自分の中でずうっと想像してた。そういうのもあって、この本が私の中に入って、津波から逃れた要因という訳ではないんですけれども、私の中ですごく重要な本でありますので、もしよければ読んでいただきたいと思います。かといって被災地の南三陸町の方がじゃあ、この本をどれくらいの方が読んでいるのかとはと思いますが...

一方でちょっと身近な話をさせていただきますと、私の同級生の家では、明治三陸大津波の時に家が流されて、5代前のおじいさんがですね、「高台に家を建てて、ここから後の下には別個の家を建てる」という、そういう家訓って言うんですかね、そういう書類を残しておいて、まだそれは残っていて震災後、新聞何かでも報道されました。

私の家は流されたんですけれども、彼の家はまだ残っているということで、幼少期何かはその同級生の家に遊びに行ったりもしてですね、長い坂道をですね、ハアハア言いながら行った記憶があるんですけれども、震災後改めてそういう歴史ってすごいなと単純に思いました。

事前復興と言われてはいますけれども、そういった議論が黒潮町他で行われているということ、それからそういう、ある集落ではそういった勉強会とか行われていることに、私も純粋にそこまで議論がいつているのかなと、何かすごいなということは思います。結論が高台移転する、しない、となるにしてもですね、そういった議論の中から新しい展開というか生まれてくると思っていますので、できればいろんな集落でそういう議論がこれから行われていくことを期待しております。

(松本氏)

はい、ありがとうございました。吉村昭さんですね、この方は確か民俗学、地域の民族をたくさん調べて北陸の方に取材に行った時にですね、『^{くまあらし}熊嵐』とかいうクマをテーマにした何かを書いた方なんですけれど。東北に行く時に限ってみんなから聞いたのが津波の話をついつも出てくるということで、この三陸海岸大津波のことを書かれたというようなことを聞いたことがありますね。地図が調査で確か書かれたと思うんです。じゃあ、続いて浜さんお願いしたいと思います。

(浜氏)

また、まとまらない話になっていきそうですが、まず南三陸のことについてなんですけど、私も4回行きましたけど、皆さん、南三陸町って被災前から知っていました？ 実はすごく防災が進んだ所だったんです。すごく防災に熱心な町があそこまで被災したというのは、本当に我々同じ漁村に住む人間として本当に悔しいです。その方々をお招きしてこうやって話できるのは本当に貴重だと思います。ありがとうございました。

続いて私の悩みなのですが、この事前復興まちづくりを考えていく中で、今漁村の在り方とか、それから都市との農山漁村との関係、それから町の在り方、地域の在り方、家族の在り方とか、本当に深い所まで考えなければいけないのだろうなと思っております。というのも「本当にあなたの町は日本にとって、この地球にとって必要なの」と言われた時に、「どんな役にたてるのか」と言われると、正直まだはっきり言えません。魚もそれほど取れてないですし、取ったとしても乱獲につながりかねないですし、里海をきちんと残しているかということそうではないです。経済的な側面から見ると、本当にこの町というのはどんな役に立っているのだろうなと悩んでおります。それだけ悩んでもしかたがないのですが、これから私としては、今日、本当に先ほどの事例報告の中の最後に言いましたように、今日のこの機会を、スタートとして津波と共に暮らしていかなければいけない地域、いわゆる私たち地域がもっともっと連携して意見交換をして、津波から避難するとか対峙するんじゃなくて、地震や津波とどう付き合っていくか、うまく付き合っていくかというのを、一緒に話し合っていけないかなあとと思います。なので今日がスタートにさせてください。またこれからも意見交換をしていきたいと思っています。

なかなか黒潮町と美波町ってすごく遠いんですけど、南三陸町なんかというと、もっともっと遠いです。今はインターネットですぐつながったりできますので、いろんなことを意見交換して良いところ取りをしませんか、黒潮町さん、先々走って行かないでください。私たちを置いて行かないでください。あのぜひ私たちを仲間に入れてください。以上です。

(松本氏)

いいえ、とんでもない。美波町こそ先進であろうと思いますけれど。新しいお話をいただきました。地形的に南三陸は黒潮町の佐賀地域に非常に似ていると思ったらしいと思います。それから陸前高田と言う所は西の大方地域の地形に非常に、地図を見たら、川の位置とか似ております。これからもですね、こちらこそよろしくお願いしたいと思います。最後にじゃあ、大山記者の方でまとめをお願いしたいと思います。

(大山氏)

さっきの話の繰り返しにもなるんですけど、その高台に、事前に移って津波に対する防災力は上がったとしても、コミュニティは弱まって、本当にそれは防災力が上がったかという議論にもつながると思います。高台移転をするにしてもしないにしても、本当にその場所の地域地域でみんなが継続して暮らし続けられるような場所、地域を作っていくということが原則になるのだと思います。

現状、その事前の高台移転をする時に財政的なこともあって、防災集団移転促進事業が話題の中心になってくると思うのですが、今日は皆さん話されてたようにやっぱり課題というのは、少なくともだと思います。そして高台移転することは決して悪いことではないと思いますし、ただ制度適用することが目的になってしまって、逆に少し不便だけど我慢しようとなってしまうのは、もう元も子もないと思うので、制度に使われるというよりも制度を使いこなすというのが、いろんな意見を言っていってより良いものにしていくということが大事なんだと思います。例えば、その防災集団移転促進事業ですけど、今10軒以上集まらないと対象にならないと言われていています。国の説明とかを聞くと、「1軒ずつ違う地域から10戸集めてくれば高台移転ができるんじゃないか」という説明を受けていると聞きました。

制度的にはそうだとしても、本当にそれが現実的なのかということを考えてときに、ちょっと違う。この事業って、もともと家が建っていた場所、この事業に使うためにはその場所、先ほど南三陸でもおっしゃってましたけれども、危険地域・危険区域に指定することが条件になるので、その場所ってずっと新しく家を建てられなくなるわけで、もし1軒だけならいいかもしれない、その周りの方がどう思うのかとか、周りの方の土地の価値も下がるでしょう。本当にそれで地域が安全になるのか、制度としては使っても地域として安全力、防災力が高まっていくのかと思いますし、繰り返しになりますけど、制度に合わせて住民の方の思いを無理やり変えるのじゃなくて、やっぱり思いとか現状とかに合わせて制度を見直していくべきだと思います。

こう言っていると高台移転に反対と言っているようなんですけど、決して事前の高台移転に反対と言うわけではありません。その今のままで被災した場合って、どうしても命の危険というのはもちろんあるわけですし、家や財産も流される訳です。先ほど南三陸でもその仮設住宅にまず移ってということになると思うんですけど、その今の仮設住宅の費用ももちろん掛かるわけで、仮設住宅で長い間暮らすことになると、その後のもう1回戻ってくるのが難しくなったりというお話もいただいたように、メリットがあるから皆さん考えているわけです。

先ほど神戸市の長田の例でも少し触れましたけれど、事前にまちづくりを考えておくことが必要だと思います。例えば、経済的なことで言うと、こんなに写真で「あぶない、あぶない、34メートルの津波」と、34メートルの黒潮町に限らず、20メートルの津波が来る高知に住まなくても、日本一安全という岡山だったり、それこそ人口が多い東京だったり、都市部に集まれば多分安全性も高まりますので、そっちに移ればという、先ほどある専門家の方が言われてたようなことになってしまえば、日本は何をするのかということになると思います。

結局、高知には、他の地域には無い魅力があるのは間違いないでしょう。それこそ南海地震100年、50年に1回か、何回か続いてきたものなんですけど、その中でやっぱり住み続けてきた、その地域に住み続けてきたのが僕たちなわけで、そこには多分理由があると思います。もちろん若い世

代も僕たちも僕も含めてそうですけど、外へ出て行きたいとかいう思いもあるでしょう。やっぱり仮に1回出ていっても戻ってこれる場所、戻ってきたい場所というのが古里だと思います。

その高台移転を含む事前復興の議論というのが、地域の魅力だったりコミュニティの大切さを見直すきっかけに、なって欲しいなと思いますし、そんな記事を書いていきたいなと思っています。

(松本氏)

はい、ありがとうございます。これからますます大山記者の記事を楽しみにしていきたいと思えます。よろしくお願いします。ひと通り私この今日の事前復興を考えたシンポジウム、コーディネーターとして進めさせていただきましたが、このメンバーで、このようなお話を聞ける機会というのは、なかなかなかったのではないかと思います。さまざまな最高のお話をたくさんいただいたのではないかと考えております。

先ほど浜さんの方から、「南三陸町知ってましたか？」というお話がありました。もともと防災に非常に熱心で防災に強い町であった。それが先ほど、前段の三浦さんご紹介していただいたビデオで見たような状況で、ここまで被災続けられてしまわれることは自然災害の脅威ですよね。それにいかに自分たちは備えていくか、決して戦うというのは適切じゃないかもしれません。浜さんが言われたように自然とうまく付き合っていく、生活する人にとっても、その担当する職場の人にとっても、24時間365日戦っておれば、大変なしんどさを伴うのでございますので、やはり自分でこの南海トラフの地震・津波についても自然の一部、それに対していかに事前復興とかの考えをいろいろ繰り返しながら、いかに備えていくか、そしてどういうふうにもうやり過ごしていくかという所を、できるだけ早い段階で議論していくということが非常に大切ではないかと思います。そういう意味では今日のシンポジウム貴重な南三陸の皆さんの体験、つらいお話もあったと思えますけれども、非常に有意義な会でなかったかと思っております。

以上で私の方のこのシンポジウムのパネルディスカッションの方のコーディネーターは終了させ



ていただきまして、マイクの方は事務局の方にお返ししたいと思います。どうもありがとうございました。

(会場から拍手)

(司会)

コーディネーター、パネラーの皆さん、どうもありがとうございました。希望を持って自分の町に住み続けることができるようにということで被災地を知る、そしてとりくみを知るということができたのではないかと思います。今日のこの貴重な意見を今後の高知県の取り組みにぜひ生かしていきたいと考えております。それでは最後に主催者を代表いたしまして、高知県自治研究センター・石川常務理事より閉会の御挨拶を申し上げます。

(石川氏)

皆さん、大変長時間ありがとうございました。実は昨日、東京に出張しておりました関係で開会の時間に間に合わなくて、閉会の方で御挨拶を申し上げさせていただくことをお詫びをしたいと思います。ここに入った瞬間、凄まじいビデオの映像が流れておりました、今日3人の方からご報告をいただいたわけですが、三浦さん、聞く方もつらいお話で三浦さんもつらかったらと思います。本当にありがとうございました。

また及川さんと浜さん、それぞれのお立場でのとりくみを報告いただきまして、地元の黒潮町で現在それこそ町を挙げてやっているとところのとりくみを、大いに参考になったなと思います。本当にありがとうございました。

そしてシンポジウムのコーディネーターを務めていただきました松本さん、そしてパネリストを務めていただきました大山さん、本当にありがとうございました。

私も高知県自治研究センターは、今回で3回目のこの「3.11からの東日本大震災からのシンポジウム」を開催をしました。1回目は「生きる」、2回目は「逃げる」、今回は「事前復興を考える」ということでした。今後も連続して開催をしたいと思っております。本当は、実は1回目、2回目は高知市で開催をしまして、今回、黒潮町で開催をするということで、どれくらいの皆さんがおいでいただけるのか心配をしておりましたが、高知市内でやったよりもたくさん来ていただきまして本当にありがとうございました。今後も引き続き、連続でシンポジウムを続けていきたいと思っておりますし、引き続き関心を持っていただいて、またご参集いただけたらと思います。

そしたら最後に前の5人の皆さんに心より感謝を申し上げたいと思います。ご参集の皆さんにも感謝を申し上げてお礼と代えさせていただきます。本日はありがとうございました。

(会場から拍手)

(司会)

以上で本日のシンポジウムを終了いたします。ご参加いただきました皆さん、どうもありがとうございました。

